
小さな祈り・補遺

早稀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さな祈り・補遺

【Nコード】

N7843I

【作者名】

早稀

【あらすじ】

完結作「小さな祈り」の外伝的小品を何篇か書いてみます。こんなのが読みたいというリクエストがあれば、取り上げることもあるかと思います。

1. あきにいちちゃん

「入学と同時に失恋とか、ありえないでしょ」

香澄が机にべったり張り付きながら愚痴った。

「まあまあ……仕方ないよ、1年の時から彼女がいるんだし」

愚痴に付き合っている貴子は、もう何度目かわからなくなっている香澄のぼやきに苦笑した。

入学からもう二月近かったって、そろそろ夏服に代わろうかという時期。初夏の日差しは既に猛烈で、外を歩くのにも度胸がいる。

冷房がいい加減古くて暑さをほとんど解消してくれない教室は、丘の上という地形もあって窓さえ開ければ風通しだけはいいから、乾いた風が通り抜けて、気持ち良くなくもない。

「知っててなんで教えてくんなかったのよ」

という香澄の非難も、いい加減聞き飽きてきた。

「一目ぼれの前に注意するとか、どんだけエスパーなのよ」

貴子は何度目かわからないその反論を口にする、チョコを口の中に入れた。

香澄の片思いの相手は生徒会長。入学式の挨拶で演壇に立ったその姿に惚れた、という。

貴子はその生徒会長を前から知っていた。

「幼馴染なんでしょ、彼女との仲を妨害するとか」

「できるわけないでしょ、あれだけ仲良いんだから」

香澄と同じ目に遭った同級生は少くない。

大体、目立つ上級生がいい男だったら、新入生に人気が出ないはずがない。会長は背が高くて顔立ちも整っていて、なにより余裕ある立ち姿が綺麗だった。新入生の憧れにならないほうがおかしい、と、会長を幼い頃から知っている貴子でも思わないではない。

でも、それは叶わぬ恋。

会長には、とびつきり美人の彼女がいる。

副会長を務める会長の彼女は、貴子の記憶では、付き合い始めの頃はメガネをかけていたはずだった。それが、いつの間にかコンタクトになり、髪も野暮ったい伸ばしっぱなしのロングから、レイヤー入りの軽やかなロングに変わって、年下の貴子でも嫉妬したくなるほど綺麗になった。

「美男美女の生徒会長と副会長カップルとか、どこの少女漫画だよ、腹立つ」

「しかも学校始まって以来の名将カップルとかいわれてるしねえ」
貴子は慨嘆した。あの兄ちゃんが名将と来たもんだ。

「去年の文化祭とかすごかったもんなあ」

香澄がいう。志望校の文化祭ということで香澄も貴子も見学に来ていたけれど、確かにすごかった。行事に醒めた学校、という定評がウソのような盛り上がりで、その盛り上がりを陰から演出していたのが現会長たちだというのは、校内では常識だった。

「ほら、行くよ。部活遅れるぞ」

と、貴子は立ち上がった。香澄と二人で被服部に入ったのは一月ほど前のこと。文化祭のファッシュショー目指して作品作り……というのは上級生の話で、今はひたすら運針の練習でちくちく針を操るだけの日々。

「あうー」

だらだらしたくなる香澄の気持ちはわからなくもないけれど、ここでサボっていても仕方がない。

被服教室のある棟までの道すがら、強い日差しの照りつけるグラウンドから聞こえてくる体育部の声や、吹奏楽部の練習で管楽器が奏でる調子っ外れの音を聞きつつ、貴子は思った。

香澄、あんたの片思いなんか甘っちよろいにも程があるわ。こっちは年季が入ってるんだから。

そんなことを考えていたから、渡り廊下の向こう側から良く知った顔が歩いてくるのを見つけて、貴子は思い切り動揺してしまった。
「やだ、会長だ……！」

香澄が小声でいい、興奮して貴子の腕をつかんで振り回してくれ
たおかげで、その動揺も隠すまでもなく消え去ってくれたのが、こ
の際はありがたい。

「落ち着きなさいよ、珍獣じゃないんだからさ」

「なんだよ、俺は一年の間じゃ珍獣扱いか」

会長は貴子の言葉を受けて苦笑していた。

「珍獣なら出会ってありがたがってもいいけど、先輩じゃありがた
みもないしね」

貴子がいうと、香澄は「なにいつてんのよあんた」とものすごい
目で睨んでいるのがわかる。でも、無視。こっちは生まれた時から
の知り合いだ。

「確かに俺じゃ何のありがたみもないな。これから部活か？」

会長の声はいつもと変わらない。というか、この人は誰と一緒に
も変わらない。たった一人、彼女の前以外では。

「うん……先輩は生徒会？」

「いや、今日は無し。演劇部の公演が近いから、評論家やってくれ
って頼まれてるんだ」

いつの間にか伸びた背は、もう貴子が見上げないと視線を捉えら
れないほどになってしまった。

「ほら、早く行かないと部長に怒られるぞ。あいつも最近やけに気
合入ってるからな」

そういうと、会長は気が付いたように指を鳴らした。

「そうだ、おばさんに伝えといてくれるか。今度の地区清掃、河川
敷のごみ拾いになったから。そのうち回覧回るけれど、幹事は俺が
やるからよろしくって」

「あきにいちちゃんがやるの？」

思わず、長年呼び続けてきたあだ名が出てしまった。学校では使
わないようにしていたのに。

「親がどっちも休日出勤確定でさ。最近バイトもしてないからって
俺に押し付けやがった」

「大変だねえ」

「大変なんだよ。お前もちろん来るよな？」

「えー」

「えーじゃなしに。いいか、来いよ、待ってるからな」

そういうと、会長はぽんと貴子の頭を軽くなでて、「じゃな」と手を上げて歩いて行った。

「いいなあああ」

香澄がたまりかねたように身もだえする。

「会長にあんな風に話しかけられるとかうらやましすぎだよ、ちょっと、あんた私と人生とつかえて」

「無茶いわないでよ」

「あーん、あんな風になでられたら私死んでもいい」

「やつすい命だなおい」

突っ込みながら、貴子は自分の顔の赤さがばれないか不安で仕方がなかった。

どきどきしていた。

私だって、と貴子は思う。私だって、あんな風になでられたら嬉しくて死にそうになるんだ。

生徒会長、佐藤晃彦。

貴子の三軒隣に住むご近所さんにして、貴子の初恋の相手。

叶わない恋なんてこの世から無くなってしまえばいい。

私の恋は絶対叶わない。

貴子のつぶやきは、まだ熱をはらんでいる夕暮れの大気の中に消えていく。

部活帰りの道。

自転車でゆっくりと一人行く道が貴子には寂しい。

友達と群れるのはどちらかといえば苦手だった。女子の間でそれ

を通すとただの嫌われ者になるから付き合ってはいるけれど、限度がある。

それでも寂しさは募るのが矛盾で、その矛盾が貴子にはつらい。中学校に入ったばかりの頃、同じように帰る道は、寂しくなかった。徒歩通学だった中学で、となりにあきにいちやんがいたからだ。晃彦は、ぐんぐん背が伸び始めていた。部活は陸上部だったけれど、成長が急すぎて体が付いていかず、記録はぱっとしなかった。だから貴子なんかと一緒に帰れたのだと、今にして思えば、晃彦ののほほんとした態度が懐かしい。

本当は悔しかったはずだ。同期の選手たちが次々に自己記録を破っていく中で伸び悩み、帰りは近所の妹分と馬鹿話をして帰るしかない生活。

でもそれが貴子には貴重だった。伝えたことはないけれど、大好きなあきにいちやんと少しでも一緒にいられたらと思い、自分も陸上部に入った貴子だから、帰りに一緒にになれるのは幸せだった。

晃彦はいつも家の前まで送ってくれた。

「当たり前だろ、すぐそこなんだから」

と晃彦はいう。そのすぐその距離を、貴子は壊すことが出来なかった。中学一年生にとって中学三年生の先輩は、標的にするには大きすぎたかもしれない。

もてない、目立たない、ぱっとしないと三拍子そろった「ダサ男」を自称する晃彦だから、自分が一緒にいてあげないと、という訳のわからない乙女思考もあった。

それが脱皮する前の蝶の言い草でしかないことは、高校に進学した晃彦を見て痛いほどわかってしまった。晃彦はバイトを始め、背に見合うだけの体が出来ていき、同時に色々な経験からどんどん大人の顔になっていった。貴子が中学で立ち止まっているうちに、ずるいくらいに遠くへ行ってしまった。

そして秋、晃彦には彼女が出来た。

それを知った時の衝撃と、その夜の悔し涙は、たぶん一生忘れら

れないだろうと貴子は思う。

同じ中学出身だから、貴子も顔は知っていた。

渋谷由紀。

顔は知っていたけれど、目立たないにも程がある人だったから、名前も知らなければ、どこの学校に進学したかも知らなかった。

そんな女が、晃彦と付き合っていくうちにどんどん綺麗になっていった。

土台が良かったこともあるのだろうし、晃彦と急に仲良くなった上級生たちが寄ってたかって彼女のルックスを改造したことも良かったのだろう。時々晃彦と一緒に歩いている永野家のお嬢様など、自分自身がカリスマ的な美人のくせに、貴子の憎むべきライバルを綺麗にすることに命を賭けているような気配すらあった。

生徒会副会長になった晃彦がその年の卒業生を生徒代表の一員として送り出す頃には、晃彦の彼女は、もう貴子の手が届く相手ではなくなってしまうていた。

貴子も認めざるを得なかった。

晃彦と並んで歩く由紀は、可愛らしいくせに媚がなく、顔立ちは大人数びているのに表情があどけなく、女の貴子から見ても悔しく感じることに出来ないほどに、美しかった。永野家のお嬢様は別格としても、少なくとも貴子が知る限り、晃彦の隣にいてこれほど引き立つ女性はいない。

かなわない。

成績は常に学年上位、生徒会役員としても経験豊富で、去年まで「学園の女帝」として君臨していた永野家のお嬢様とはタイプが違ふものの、「学園のアイドル」の座を継承したのは彼女だった。

かなうわけがない。

いつの間にか家の前にまでたどり着いていた。

貴子は大きいため息をついた。

「ただいまあ」

叶わない恋に胸を痛めつつ帰宅するなんて、そんな乙女回路は私

には似合っていないはずだ。そう考え、自分を笑い飛ばそうとした貴子の目の前に、当の本人がいた。

「お帰り。遅かったな」

「あ、あきにいちゃんっ」

晃彦が、玄関先に座っていた。

「な、なんで」

「なんでって、洋ナシのお裾分けしにきたら、早速煮物でお返してことになってだな」

「ごめんなさいね、お待たせしちゃって」

奥から母が出てきた。

「あらお帰り。晃彦君、これ持って帰ってちょうだいな」

「おお、こんなにですか。なんかかえってすいませんね」

「傾けないでね、汁物だから」

晃彦は、貴子の苦悩など知るはずも無く、いつものほほんとした顔で荷物を受け取っている。その油断しまくった横顔が素敵だと思えるのだから、貴子も大概重症である。

そう、私にはこのご近所さんつながりという武器がある。あんなすごい美人さんでも、これだけは持てない「幼馴染」という武器。たくさんの思い出という武器。

「あきにいちゃん、今度のごみ拾い、どこ集合？」

「あれ、来るのか」

「来いっていったの誰よ、せっかく行ってやろうって気になったのに失礼ね」

「そりゃ悪かった。てか、別に集合場所じゃなくてもいいだろ。時間になったら迎えに来るよ」

「ああおいで、迎えにおいで、下僕のように迎えに来るがいいさ」

「なんだそりゃ」

晃彦が笑った。貴子も笑った。

これでいいや、と思えてしまった。

2. 1. 由紀の恋が目覚めた日

久しぶりに言葉を交わしたのは、文化祭実行委員にされてしまった私が、その初めての会合に出た会場でのことだった。

「渋谷さん、隣、いいかな」

ぼんやりしていた私は、急に言葉をかけられて、びっくりして顔を上げた。

「あ」

と、声を上げてしまった。

そこにいたのが、中学時代からの想い人だったから。

「ああ、晃彦くん」

とっさに気の利いた言葉なんか、出てくるはずがない。私はただ名前を呼ぶことしか出来ず、それすらも上出来だと思えるほどに頭が沸騰してしまった。

どうして。

どうしてあなたがここにいるんですか。

「……どうぞ」

芸のないセリフしか口からは出てこない。

「じゃ遠慮なく」

晃彦くんは、そんな私の醜態に気付いた様子もなく、ごく自然に隣に座った。

座ってくれた。

なんで晃彦くんは私の隣を選んだんだろう。他に席に空きがないわけじゃないのにどうして。もしかして少しは私の気持ちに気付いてくれていたりするとか、いやそんなことあるわけないんだからきつと他の席に座れない理由なんかあるのかもしれない、私の存在なんて気付いてもらえてるはずがないし、でも私の苗字を呼んでくれたから存在くらいは知ってもらえてるのかも……

私はぐるぐると沸騰する頭の中で、意味があるようなないような

言葉を並べ立てていた。とても落ち着いてなんかいらなくて、急に腰の辺りがむずむずしだして、いすの上で身じろぎした。

私なんかの隣に座って居心地悪いんじゃないか、とか、私なんかすぐに消え去ってしまったらきつと晃彦くんはすつきりするんじゃないか、とか、考えているうちに私の口は暴走していた。

「……晃彦くんも、押し付けられたんですか？」

いった瞬間に後悔していた。何をいつているんだろう。自分が押し付けられたからといって、彼も押し付けられたとは限らないのに。仮にそうだとしても、私とは違う。彼なら仕事が出来ると思うから、みんなが彼に任せたんだ。私のように、押し付けても反発しない相手だから押し付けられた人間とは違う。

「うん。そういうってことは、渋谷さんも？」

晃彦くんは私の動揺に気付いてしまっただろうか。ごく気軽に応じてくれる気さくさが、どこまで晃彦くんの正直な態度なのかかわからない。

私は、自分で質問を振ったくせに、どうにかうなずくのがやっとだった。

たぶん私は耳まで赤くなっている。

いやだ。本当に消えてなくなってしまうたい。

「帰宅部だから放課後は暇だろうってさ。いい迷惑だ」

そう付け加えてくれた晃彦くんの口調は至って自然で、それがまた悲しい。私は意識されていないし、名前を知っているという以上の存在じゃない、自意識過剰も大概にしておけ、という冷静な自分の声が聞こえる気がした。

「そうですか」

固い声が自分の口から出るのを、私は絶望的な気分で聞いていた。もう、その後どんな会話をしたのか、私は覚えていない。きっと「はい」とかなんとか繰り返すのが精一杯だったはずだ。

最低だ、私は。

晃彦くんはすぐにしゃべらなくなった。多分、私に失望したんだ

ろう。当然だ。

会議が始まり、生徒会執行部の誰かがしゃべっていたけど、私にそれを聞いている余裕なんかなかった。ただ、この時間が早く過ぎてくれることを願った。

何もしていないのがつらすぎて、私はほとんど無意識に落書きをしていた。後で資料を見ると、なぜか食パンマンとアンパンマンが並んでいた。幼稚園の頃から描いていた落書きだけど、中学生以来、ほとんど書いた記憶がない。自分に失望したあまり、幼児帰りでもしていたのだろうか。

その後、一言も口を聞くことなく、会議は終わるはずだった。

でも、神様は私にさらに試練を課した。

全体会議が終わると、私はなぜか晃彦くんと肩を並べて歩く流れになってしまった。

あんなに憧れていたはずの晃彦くんの隣という立ち位置。

過去の自分がこんな場面を見たら、枕に顔をうずめてじたばたしそうな場面のはずだった。

でも、今の私には、きつい。

「クラスの企画を管理するっていったってさ、企画を審査するのは執行部だし、予算管理は会計係だし、別にやることないじゃんなあ」
晃彦くんは、たまたま同じ「企画担当」に割り振られてしまった私に氣を使っただけ、声をかけてくれた。

背が高い晃彦くんの声は、上から柔らかく降り注いでくる。心地いい音。

私を知っている中学時代の晃彦くんは、陸上部の中で記録が伸び悩みつつも、いつも明るくまわりを気遣っている人だった。その頃の晃彦くんはこんなに大きくなかった。

クラスでも身長順では前から何番目かだった晃彦くんは、背が急に伸び始めると同時にタイムを落とした。

私は知っていた。

晃彦くんはそんな中でも同級生や下級生のタイムアップのために

惜しみなく協力して、アドバイスもして、どんどんまわりを底上げしていったこと。自分の記録アップが望めないとわかると、ごく自然にそうしていたこと。押し付けがましくなく、さりげなく。

そんな姿を見て、私は彼を好きになっていた。

「雑用係、でしょうか」

私はどうにかそう答えた。会話の流れとしておかしくなかったかどうかともわからないまま、無理やり出した言葉だった。

「ありそう」

晃彦くんは私の言葉にうなずいてくれた。間違っただけではなかったらしい。

「どうせ自分らで管理するなんて約束、どこも守らないだろうし。結局俺らが全部やった方が早い、みたいな感じになりそう」

「だとすると、書類作りはさっさと済まちゃわないと、後で必要になってから、なんて考えていたら追いつかなくなりそうだね」

「各クラスの企画が出そう前に書類作って、使い方の簡単なマニュアルも作っちゃって配付して、ついでに自分たち用のチェックリストも作ろうか」

晃彦くんは次々に言葉を繰り出してくる。

隣を歩いていて、その回転の速さに圧倒されてしまった。

この人、やっぱりすごい。

「資材のリストは去年のがあるけど、数とかチェックしなきゃいけないし、そのあたりもちっちゃと終わらせないと、後が怖そうだね」

「新規購入分の予算配分なんかはどうなってるんだろう。購買分は会計と相談なのかなあ。確認しとかないと」

晃彦くんがバイトをしていることは結構有名。しているバイトが土木作業というのもこの学校では珍しかったし、掛巢さんという地元不良界の有名人の気に入られているらしいという噂もあった。

晃彦くんは前から大人だったけど、もう私の想像が付かないくらい先を歩いているのかもしれない。

自虐や自己否定に走っていた私も、晃彦さんの言葉を聴いているうちに、そんな卑小な自分のことより、晃彦さんのすごさに惹かれた。

「そんなじゃ……どうかした？」

晃彦さんは、私が思わずその横顔に見とれてしまっていたのに気付いたか、私に問いかけてきた。

私はその事に驚くことすら出来なかった。

淡い想い、という程度だった私の恋心は、もう、確実に強い想いに変わっていた。

「……うん、すごいなあ、と思って」

「なにが？」

「仕事、できる人なんだなあって」

私はいつの間にか必死になっていた。どうしても、今の自分の気持ちの何十分の一かでも伝えたかった。

晃彦さんがすごいことを、私は知っているということ。私はあなたを見ています。

「始まってもないのに、んなのわかんないだろ」

晃彦さんは私の思いになんか気付いてくれるはずもなく、ちょっとぶっきらぼうに答えた。

「ううん、始める前からそうやって仕事の先が読めるの、すごいと思います」

私はたぶん晃彦さんにとって聞き取りにくくない限界の小声でいう。それ以上の声は、のどが応えてくれなかった。

必死の一言だった。今の私の限界。

「バイト先でさ、こうやって仕事の先の先を考えてる人がいるんだよ」

晃彦さんは気負うこともなく、ごく自然体で答えてくれた。

「後で苦労するのが嫌なら、とかいう問題じゃなくてさ、大人が仕事やってて、段取りが上手いかわなくて失敗したら、自分以外の他人に迷惑がかかるだろ。金だつてばかばか出て行くし、土木工事な

んかだと下手すりゃ死人が出る」

晃彦くんの話す内容は、もう、私が知らない世界の話だった。高校生になってしばらく経つけど、死人が出るような切羽詰った場面に立つかもしれない、なんて覚悟で物に当たったことは、少なくとも私にはない。想像もつかない世界。

彼は私とは違う世界に住んでいる。それが強烈な憧れにもなるし、断絶にも感じられる。

「……でも、自分で選んだ仕事じゃないですよ、実行委員も、クラスの管理担当も」

私は、プリントを挟んだルーズリーフを抱くようにして持ち、それはわらにすぎる溺れた者の仕草だったかもしれないけど、それを抱くことで自分を無理に奮い立たせた。何かを抱いていると不思議に力が出る気がした。

「なのにちゃんと仕事のこと考えてる」

「うーん」

晃彦くんは少し考え込むようだった。私なんかのために。その誠実さが私の心を捉えて離さないなんて、この人は気付いてもいないんだろう。

「確かにそうだけども、実行委員だって断ろうと思えば断れたんだし。それをしなかったんだから、やることはやらないとなあ」

それに、と晃彦くんは言葉をつないだ。私はその場に固まって、声が降りかかってくるのを待つことしか出来ない。

「誰かにいわれて動くだけなの、俺嫌いなんだよね。バイトで大人に囲まれて仕事してるとき、学校で高校生ごときに使われるの、なんかむかつくんだわ」

私は体中に電気が走ったような気がした。

やっぱり、この人は大人だ。もう大人の世界に入り込んでいるんだ。私とは違う世界の中にいるんだ。

高校生に使われることすら自分には過分なことのよう感じている私。

高校生ごときに使われるのはむかつくとまでいってしまう彼。分不相応な恋に思えたけれど、それでも、やっぱり、私は晃彦くんに憧れていた。

「……そういう物の見方もあるんですね」

かろうじてそれだけつぶやくと、私はどうにか見上げて晃彦くんの目の辺りをさまよわせていた視線を、ついと落とした。

これ以上は無理だった。

「バイトしてるの、すごいですよね」

と最後につぶやいた。

なにをいつているんだろう、今さら。そう自分でも思ったけれど、それも本音のひとつだったから。

「すごいかねえ」

晃彦くんは私の反応に不思議そうな顔をして首をかしげていた。

彼にはわからない。

太陽の下を歩いて少しも揺るがない人。

人々の間にいることを平然と受け入れられる人。

どちらも私にはないもの。

だからこそ惹きつけられるもの。

夜郎自大な、無知から来る傲慢とは違う、学校という限られた閉じた世界以外の世界を知っているからこそ身についた、余裕。

それまで漠然と「いいなあ」と想い続けていた、その私の恋心は、偶然のいたずらで花開いてしまった。

大げさかもしれないけれど、私の人生はここから始まったんだ、と、後になって私は思い知ることになる。

2. 1. 由紀の恋が目覚めた日（後書き）

仕事が休めません。残業の嵐で身動きがとれず更新できずに申し訳ありません。気長にお待ちください。しばらく由紀視点を楽しんで書きたいと思っています。

2. 2. 由紀の周囲

「気が小さいのもいい加減にしないと、後悔するわよ」

母がいきなり真面目な顔をしていうから、私は面食らった。

「……わかってるよ」

母は恋話を糧にして生きると断言している。ドラマも好きだけれど、恋話は現実に勝るものはないそうで、だとしたら娘の話なんか最高の糧になるわけで。

そもそも、恋話が好きな女がなぜ農家に嫁に入ったのか理解に苦しむところだけど、母が夢中になるのは他人の恋話であって、自分のものではないらしい。

「あれだけ懂れてたんだから、まともに話せないのは仕方ないにしても、ねえ」

中学時代から逐一話をさせられていたせいで、多分母は、私より晃彦くんに詳しい。

彼がどんなバイトをしていて、どんな人と知り合いになっていて、彼のご両親がどんな人か、妹さんがどんな子か、そんなことは確実に私よりよく知っている。主婦のご近所情報収集能力はすごい。

「中学の頃はなんであんな子を好きになるか、あんたの気が知れなかったけど、意外に先物買いの才能があるのね、あんた」

「先物買って……」

「あんなにいい子に育つとは思わなかったものね。大したもんよ、それを見抜いて好きになった嗅覚は」

「褒めてるの？ けなしてるの？」

「褒めてるじゃない、充分に」

だからこそ、と母はいう。

「惜しいのよ、あんたの態度が。まだ誰も手をつけていないうちに彼を手に入れなくてどうするの」

「どうもしないわよ、ほっといて」

母の無駄話を断ち切って、私は居間から離れた。

どうするのといわれても、私に何が出来るというんだらう。

こんな小心者で、臆病者で、卑怯者な私に。

私は、晃彦くんの前で冷静でいられる自信なんか、これっぽっちもない。おろおろするだけで何も出来ない自分の惨めさを突きつけられるより、逃げ出して心の平安を得ることを優先してしまう卑怯者。

晃彦くんの前に出る資格なんかない。

同じ憧れでも、同性の綾華さんへの想いは、素直に口に出すことも出来たし、態度にも出せた。不思議なものだ、と思ったりもしたけど、これは反作用かもしれない。

晃彦くんという、自分にとって大きすぎる存在が近くにいるから。かえって綾華さんに向ける好意が素直に出せてしまっているのかもしれない。晃彦くんへの想いが反作用を起こしてくれているおかげで、別の角度に想いを向けるのが容易になっていたかもしれない。それは綾華さんには失礼な話かもしれないけれど、綾華さんへの憧れは本物だ。それは自分でも否定しないで済むこと。

綾華さんは髪の手前からつま先まで、何もかも私とは違っていた。まず、道具立てが派手。派手といういいかたがよくなければ、華やか。目も口も輪郭も、胸も腰つきも、私に備わっていないすべてが憧れの対象。

性格も、私とはまるで違っている。あの人くらい堂々と自分を出せたら、出せるだけの自分があったら、と思う。出して恥ずかしくない自分なんて、私にあるとは思えない。

不思議と、嫉妬はしなかった。綾華さんがもうそういうレベルにないからか、比べるのも馬鹿馬鹿しいくらい自分が卑小だからか、綾華さんはただひたすら憧れる対象だった。

だから、一緒に働けるのが嬉しい。

見ていられるのが楽しい。

その場に晃彦くんがいると、もっと楽しい。

晃彦くんと一緒にいられるのは、嬉しい反面、つらかった。自分がどれだけつまらない人間かを突きつけられてしまうようで、時々耐えられないくらい惨めになる。何をされたわけでもないのに。

でも、綾華さんと一緒に仕事をしている晃彦くんを見ているのは好きだった。

二人の展開が速い会話を聞いているのも、憧れの二人を至近距離で見えていられるのも、幸せだった。

傍観者でいられる限り、そして二人をそっと支えていられる限り、私は幸せだった。こんな私でもそばにいられる事実が嬉しくて、心が弾んだ。

門限があるのがちょっと悲しかった。

今までだって門限がなかったわけじゃないけど、それに引つかかるようなことをしてきた訳でもなかったから、気にもならなかった。学校に行って帰るだけの生活だった。たまに友達とどこかに寄ることはあっても、お金がない高校生に出来る贅沢なんかたかが知れていて、特に趣味やバイトがあるわけでもない帰宅部の学生に、家に帰る以外のことができるはずもなかった。

文化祭の仕事が入ると様子が違ってきた。

私でもできることがあるのは嬉しかったけど、門限の中では終わらない仕事量の日がある。

そうすると、晃彦くんと綾華さん、その他の実行委員に自分の仕事を託して帰らなければいけなくなる。

それが心苦しくて、つらかった。やりかけた仕事を残すのも嫌だったし、それで人の負担を増やしてしまうのがもっと嫌だった。

門限を決めたのは父。

それに抗議すると、父は答えた。

「身の安全が第一だ」

きっぱりいわれてしまうと言い返せない。

「……色々な経験をすることは悪くないことだっていつも私にいつてるじゃない。傷付くことだって大切なことだって」

かろうじて言い返す言葉を思いついても、次の言葉で完全に敗北した。

「成長のためには傷付くことも大切だが、夜に外歩きして何かあったらそれどころじゃないだろう。それと成長とは別次元の話だ」

感情のままに動ける人間ならともかく、私はどちらかというと理屈に屈してしまうタイプ。父の論理の正しさを理解してしまえば、抗えなかった。

実際、近所で連続路上強盗事件が起きたのは最近のことで、犯人は捕まっていない。そんな被害に遭うことと、人との付き合いの中で傷付いたり傷付けたりするのは、確かに次元が違う話だ。

それにしあって、時間が近くなると電話をかけてきたり、わざわざ迎えに来たりする父は、明らかに過保護だ。いい父であろうとする理想家の自分と、娘を過保護にしてしまう感情家の自分とが、父の中でせめぎあっているのだそうだ。

それでは、門限ぎりぎりまで学校に拘束されてしまう文化祭実行委員の仕事に、父が悪印象を持っているかという点、それはそれで違うようだ。

「色々経験すること、その中でも今回のことはいいい経験になるだろうから、応援するさ」

特に、永野家のお嬢様である綾華さんとの付き合いを大事にして欲しいらしい。

「名家のお嬢様だから？」

「違う。お前を迎えに行った時に一度話したが、あれはあんな馬鹿親父から生まれたとはとても思えない傑物だ。付き合っておいて損

はない」

この後、私は本当に色々な経験をする事になったけれど、この時の父の慧眼を思い出しては感心することになる。

確かに綾華さんは傑物だった。ただのギャルどころか、不良の象徴のような面を持つ人だったけど、真摯さもカリスマも人並み外れていて、人をぐいぐい引っ張っていく力の凄さは、感動して涙がにじんでくるほどだった。

永野家の現当主は県会議員をしている綾華さんのお父さんだけど、父は昔からこの人を毛嫌いしていた。

「馬鹿に上に立たれることほど頭にくることはない」

綾華さんが盛大にぐれたのも、この人が原因だというから、逆に興味が出てくる。一体どんな人なんだろう。会いたい、とまでは思わないけど。

そんなわけで、門限は解除されず、でもその範囲内でならむしろ家族の支援を受けて仕事が出来るという、私なりの環境が出来上がった。

ちなみに母はというと、相手がいい子なら門限破りで父娘喧嘩になるくらいの恋愛展開を希望しているらしい。他人事だと思って。

2. 3 由紀の革命前夜

好きな気持ち、たぶん、暴走していた。

晃彦くんがどんな風にみんなに見えているか、それが気になって仕方がなかった。

文化祭実行委員が動き始めて、綾華さんと一緒に動くことが多くなると、晃彦くんの注目度は一気に上がった。

本人が明らかにその事に気付いていないのが少しおかしかったけれど、女子の噂話は男子には聞こえにくいのも確かで、しかもその噂話は日々変化する。

ただ、好感度が上がっていたのは確かで、最初は「学園のアイドル」綾華さんの人気に引っぱられるようにして「ついでに」上がっていた好感度が、晃彦くん本人の魅力で上がるように変わっていくのは早かった。

噂をしている段階では女子の好感度なんてミーハーなもので、それで晃彦くんがどうかなってしまうというものではないはずだけど、そんな理屈は慰めにならなかった。

私は焦っていた。

晃彦くんとせっかく近くなれたのに、ずっと好きだったこの人を、横からさらわれてしまうことに私は耐えられるのか。

耐えていいのか。

そこまで自分の感情を押し殺すのか。

卑小な自分に埋没し続けて、手に入れる前に手放してしまうのか。勇気を出すのは今じゃないのか。今以外にあるのか。

などと考えて自分を追い込もうとしたところで、それで動き出せる人間なら、多分その前に動き出している。動けない人間は、どう追い込もうが、決して自分からは動かないものなのだろう。

好きだった。でも、だからどうしたいという想いも、願いも、私には生まれてこなかった。

自分から動いてどうなる？ 私が受け入れてもらえなくても？
こんなくだらない私が受け入れられるはずがあるとしても？

今のままでいい、と思った。すぐに文化祭は終わり、また口も聞けないような遠い仲になってしまうのが目に見えていても、ちよつとでも接点が出来た今の記憶があれば、思い出があれば、これを後生大事に抱えて生きていった方がいい。

焦りと先延ばしが同居する堂々巡りの反問は、突然途切れた。

文化祭の備品を根こそぎチェックした日。

三人で取り掛かったはいいけれど、これが想像を絶する大仕事になってしまった。体力勝負の場面で私たち女が晃彦くんに太刀打ちできるはずもなく、私も綾華さんも、作業が終わった頃にはへろへろになっていた。

「なあ、これ終わんないじゃね？」

とぶつくさいいながら、それでも仕事は真面目にやっている綾華さんの様子がおかしくて、私は体力的にはきつなくても、仕事自体は楽しかった。

晃彦くんと一緒にいられて、幸せだった。

それでも、作業が終わると、一言も口を聞く気になれないほど疲れ切ってしまった。何しろ顔の筋肉までもが反応しない。調子に乗って頑張りすぎ、体力の限界を超えてしまっていた。

綾華さんも同じだったようで、生徒会室の長机の上にだらしなく寝転がり、「ありえねー……」とつぶやいていた。

私からしたら綾華さんのその姿がありえない。そんなことをしていても様になってしまうのがうらやましかったし、素敵だと思ったけど、じゃあ自分出来るかといったら、あれは出来ない。キャラが違う。

「さあ、帰りましょう。今日も一日お疲れ様でした」

最後の書類チェックを済ませた晃彦くんがそういつて締めようとした時、私は意識が半分飛んでいた。座ったまま、眠りかけていたらしい。

晃彦くんは、私や綾華さんとは大違いだった。疲れた様子がない。たぶん私と綾華さんの仕事量を足しても、晃彦くん一人の仕事量には足りないと思えるのに、平然としている。

タフだ。この人はタフだ。

男の子ってみんなこうなのかな、それとも晃彦くんが特別なのかな、私と綾華さんが体力無さ過ぎるのかな、とぼんやり考えていると、綾華さんと晃彦くんは、なにやら言い合いながら帰り支度を進めていた。

「大丈夫？ 帰れる？」

晃彦くんが、ぼんやりしている私を見かねてか、声をかけてくれた。

「大丈夫、心配いりません」

反射的にそう答えていた。

そう、これから帰らなければいけない。

どうせ門限の時間は過ぎていて、事前に父に電話はしていた。今日だけはどうしても遅くなる、というと、父は迎えに行くから連絡をよこすようにと答えてくれていた。

待つ場所も決まっていた。とりあえず「終わった」とメールを入れてしまえば、後は待ち合わせ場所でぼーっと待っていればいい。

「なんなら親呼んどきなよ。余計なお世話だけど」

と晃彦くんが言ってくれたのは、一度父に会っているからだろう。綾華さんと一緒にラーメン屋に行った日があり、その時、迎えに来た父を晃彦くんも綾華さんも見ている。

なんとなく、親を呼ばなければ帰ることも出来ない小娘に思われたような気がして、私はほとんど意識もしないままに答えていた。

「大丈夫です。ちゃんと歩いて帰れますから」

そういつて扉を開けたのは、同じように疲れ切っている綾華さん

のことはからかい半分に應對している晃彦くんが、私相手には心配してくれてしまっていることに、ちよつと反発心があったからだろうか。

他人行儀に心配されるのは、綾華さんより私の方が遠い存在だからだよ。

そんな僻みに似た感情があった。
遠くしているのは私の態度だろうに。

そうして別れた後、待ち合わせの場所に向かっていた私は、忘れ物に気が付いてしまった。教室や生徒会室ではなく、靴を履き替えているときに、手提げを置き忘れてしまっていた。疲れていたからか、待ち合わせ場所が見えるまでまったく気付かなかった。

足元に置いたのは何となく覚えていた。

戻って取りに行こうとした。教室なら置きっ放しでもかまわないだろうが、玄関はまずい。

校門の近くまで戻ったとき、人の声がした。思わず立ち止まってしまったのは、その声が、好きな二人の声だったから。

「ああ、もう、そういうんじゃないかってさあ」

綾華さんの大きな声が聞こえた。ひどくいらいらしたその声に、私はすぐ近くにあった立て看板の陰に身を隠した。

何をやってるんだろう、なんて考える余裕は無く、ただ隠れた。自分がその場にはいけない気がした。

「あんたたちと仕事するの、嫌だとかじゃないんだよ」

暗い中で、二人の姿はよく見えない。夜目が利く方でもない。でも、声はよく聞こえた。息遣いすら感じられそうに。

自分の息の音すら、私は恐れた。見つかったらダメ。私の居場所はこちらにはない。私は存在していない。ここにはあの二人しかない。

「あんたくらい、あたしにまともに向き合ってくる後輩なんていなかったし、由紀もくそマジメなくせに懂れてるとかいってくれちゃうし」

自分の存在まで否定しようとしていた私の名前が出てきて、驚いた。顔を上げて様子をうかがうと、少し距離を置いて立っている二人がいた。もっとも、ぼんやりとしかわからない。

「一緒に仕事してさ、一緒に疲れきってさ、くだらない話してさ、そういうのって今まで無かったから、結構楽しいんだよ」

それまで背を向けていた晃彦くんが、耐えかねたように振り返ったのが見えた、気がする。

「あたしも性格歪んでるから、むかつかせたんなら謝る。でも、喧嘩別れみたくなくて帰るの、嫌なんだ。次に話にくいじゃんか」
「……俺も、綾華さんと仕事するの楽しいです。話してて楽しいです。喧嘩別れは嫌です」

晃彦くんの声がした。

まっすぐで、迷いが無い声。

まぶしい、声。

胸が不意にざわついた。

何かに引っかかっているような、きしむような感覚がした。

なぜ、私はここにいるんだろう。

盗み聞きしているような自分の姿勢が疑問だったわけじゃない。罪の意識を持ったわけじゃない。そんなことじゃない。

なぜ、晃彦くんのが好きだと自覚しているくせに、彼の声が向けられる場所にいないのだろう。なぜ、他人に向けられる彼の声を聞くだけの場所に自分を押し込んでいるのだろう。

あの人の声が自分だけに向けられたら、自分にだけ向けられた言葉を送られたら、どんなに気持ちいいだろう。なぜ、私はそれを手に入れようともせず、こんな所にうずくまっているのだろう。

晃彦くんが声を向けている相手は誰だ。

憧れの人、大好きな先輩、自分が絶対になれない偶像。

綾華さんに、女としての力で私なんか勝てるはずが無いし、それは最初から無理だとわかっているけれど、あの人に晃彦くんを持つていかれたら、私は後悔の塊になる気がした。

綾華さんは、色々いう人もいるし、悪い噂も絶えない人だけど、裏切りだけはしない。他人も、自分も、多分裏切りはしない人だ。だから、彼氏がいる今、きっと晃彦くんに手を出すようなまねはしない。

別れてしまえば話は違うだろうけど、少なくとも今は決して晃彦くんを手に入れようとは思わないと思う。

でも。

晃彦くんが綾華さんに心を奪われてしまうのは、綾華さんの意思とは関係がない。それは晃彦くん自身の問題だから。

綾華さんのことが好きだからこそ、懂れている人だからこそ、そうやってしまう未来が簡単に想像できてしまった。私が男なら、とっくに綾華さんに落ちてしまっている。

いつの間にか二人はその場から立ち去っていて、私だけが柵をはさんだ看板の裏に隠れてうずくまっていた。

携帯が小刻みに震えている。見なくても、父が相手だとわかる。

私はどうにか立ち上がった。疲れと、手の平に跡が残るほどに握り締めていた緊張感からの解放が重なって、私は軽い立ちくらみに襲われた。

何をしているんだ、由紀。

晃彦くんに好かれようなんて、まして手に入れようなんておこがましいことは、最初から考えていない。そうになったら嬉しいけれど、なったらなつたで失う恐怖との戦いに消耗してしまうに違いない。それに耐えられる自分とも思えないし、まあ、それ以前に、そうはならないだろう。

ならないにしても、私は生まれて初めて、人の気持ちが欲しいと願ってしまった。そしてそのことを自覚してしまった。

私は、晃彦くんの気持ちが欲しい。

晃彦くんは私への好意を向けて欲しい。あの瞳を私に向けて欲しい。あの声で私だけに語りかけて欲しい。あの言葉で私だけに感動を与えて欲しい。

それが無理なこと、不可能なことだとしても、自覚してしまった。
由紀、あなたは自覚してしまっているのよ。

「思い出があれば、これを後生大事に抱えて生きていったっていい」
……？

うそつき。

それは、手に入れたいものを諦めるための、自分を納得させるための理屈に過ぎない。

一度くらい散ったっていいじゃない。散ってこそ諦めもつく。散らずには諦めきれない。自覚してしまったのだから。

私の中で、それまで想像することも無かったような自分が生まれ、育っていた。

恋に突き動かされ、わがままになっていく私。自分の想いを相手にぶつけようとするなんて、私からしたら一種のテロリズム。それをしようというのだ、私は。

革命的な出来事を起こそうとしていた。めまいが治まるにつれて、私は体の奥からこみ上がってくる震えを、とどめることが出来なくなっていた。思わず胸を抱くようにして、歯を食いしばった。

3. 浩樹の事情（前書き）

ちよつと長くなりすぎました。3回分くらいありますが、分けるのも面倒なのでそのまま載せます。

3. 浩樹の事情

永野家のお嬢様といえば、浩樹にとってはまったく別世界の住人だった。

自分が真面目以外に取り立てて特徴がない人間だなどということ、高校生になって二年目を迎える今となっては冷徹すぎるほどの事実として理解できていたし、それ以外の自分になりたいとも思わなかった。

「でもすげえ美人だぜ」

小学校の頃からの腐れ縁、和馬はいう。

「へえ」

浩樹の口からはひどく愛想のない返事しか出てこない。

「興味ないか」

「ないな」

「あっさりしてるねえ」

昔から目立ちたがりで、それに見合うだけの行動力がある友人に、浩樹もうらやましさを感じないではなかったけれど、だからといって彼になれるわけでもない。

「まあ、社会人の彼氏がいるとかいうし、俺たちに目を向けることないだろうけどさ」

「へえ」

「お前ほんとに情熱が薄いね。女に興味がないのか？」

「永野家のお嬢様とやらの興味がないだけだ。心配しなくても女に興味くらいはある」

「ほんとかねえ」

そういう和馬にはしっかり彼女がいる。残念ながら浩樹には彼女がいたためしがないから、反論にさして説得力がないのは仕方がない。

「そうそう、今度、東の女子と合コン設定してんだけど、人数合わ

ないんだよ。来ないか」

と、和馬がさして珍しくもない誘いをかけてきた。これが珍しくもないというあたりが和馬の真骨頂なのだけけれど、それを受ける浩樹の答えも、いつもの調子だった。

「僕が出てもし方ないだろう。場が白けるだけだ。やめとくよ」

「んなこといつてるから彼女も出来ないんだぞ。ちっとは自覚しろよ」

「してるよ。してるけど、白けさせたら他の連中に迷惑だろう」

「そりゃそうだけどさ」

「それに金もないしな。貧乏人の子せがれに合コンは敷居が高すぎるよ」

浩樹の家は町工場を経営している。父も母も、高校生になった息子に高い小遣いを与えるくらいなら、働いて汗した報酬の意味を教える方に熱心な教育方針で、進学組の浩樹としては、安い小遣いに我慢しながら受験勉強に励んでいた方が気が楽だった。

両親が働く姿を蔑んだ事はないし、ああはなりたくない、と思ったこともない。ただ、浩樹には浩樹なりの夢がある。

「彼女は夢が叶ってからでも遅くはない、か」

「そういうわけじゃないけど、それはそれでいいとも思ってるよ」

「ほんと、変わってるな、お前」

「それといつまでもつるんでるお前も、結構変り者だと思うけどな」
「お互い様か」

和馬は笑っている。

あまりにも性格が違うからか、お互いの領分を侵す必要がないからか、和馬と浩樹は、これでかなり仲がいい。

お互いがいなければいけないで別に構わないのだが、いたらいたで何となく隣にいたりする。そういう仲だ。

浩樹は別に女嫌いというほどのことはなく、彼女が欲しいと思わないでもない。ただ、和馬のように自分から積極的に行く気にはならない。

お高く止まっている気はないが、自分がもてないという自覚もあるし、女と一緒にいても何をしたらいいのか見当がつかない。めがね男子人気の風が瞬間的に吹く時期があり、そういう時にわずかに注目を浴びたことはあるが、浩樹自身の魅力に女子が注目してくれたことなど、おそらく有史以来無いに違いない。

そもそも自分に魅力があるとも思わないし、それに絶望できるほどの情熱もない。

その内、自分がどうかしてしまうほどの恋をすることもあるかもしれないし、無いかもしれない。無ければ無いで「淋しい奴だなあ」と自嘲するだけだし、あるならそれを楽しみに待っていればいい、という程度にしか思っていなかった。

醒めた高校生である。

4月最後の日曜日は、ゴールデンウィークにかかって休日真っ只中になった。部活に所属せず、バイトをしているわけでもない上に、彼女もいない浩樹としては、ただひたすらに退屈な連休になっても良さそうなものだが、そうはいかなかった。

世にいう「貧乏暇なし」という箴言は、浩樹の家では何の慰めにもならない事実そのものである。

大手家電メーカーの下請工場からもらっていた仕事のうち、連休中に仕上げて納品しないと納期割れする製品があった。どうも、工場の発注担当者が見込みを間違えていたらしく、その数が当初発注数より大幅に増えてしまった。

もっとも、仕事があるだけましでもある。近所の町工場もすっかり数が減ってしまい、これからも減っていくだろう。他人事ではなく浩樹の家もいつ潰れてしまうか、首をすくめながら日を過ごしているというのが実情だ。

町工場経営の家だから、経営者一族がまずその犠牲になる。

浩樹の役割は製造ではない。職人じゃあるまいし、いくら工場育ちだからといって、機械を任されるはずもない。その他、仕事をするのに必要な面を整えていくのが仕事になる。具体的には、昼ご飯の準備だったり、水分補給の準備だったり、使いつ走りの域を少しも出ないものだ。

バイト代が出るわけでもないから、その程度のことをだらだらとやっている分には誰からも文句は出ないのだが、なにしろ浩樹は頭がいい。ただ成績がいいだけの頭の良さではなく、使い度がある頭の良さだという事は家族が一番よく知っている。

そこで近頃、彼が任されているのは、データ管理の仕事だ。

大昔の製造業ならともかく、現代の町工場にはパソコンが不可欠になっている。品質管理や環境保護関連の書類を提出するにも、データの形で提出するように求められる時代になっていたから、情報処理ってなんだそれ食えるのか、という世代の父も、テキストファイルを添付してメールを送るくらいのことは出来るようになっていく。

ただ、父も叔父も、その面では非常に効率が悪い。少しイレギュラーなことが発生するとパニックになった挙句、授業中の浩樹に助けを求めてきたりする。携帯に電話がかかってきたって出られるはずも無く、留守電を盗み聞いているメールで返信するという不思議な作業を強いられたりしていた。

この連休中に、トラブルを少しでも減らすための作業をまとめてやってしまおう、と浩樹は考えていた。

ある程度のデータベースは日々の手伝いの中で作ってある。データベースの取り扱いまで父達に求めるのは酷というもので、「クエリ」という単語ひとつ理解させるのも難しいだろうと睨んでいたから、最初からそれは考えていない。

要は、仕事で提出する書類の見てくれが良く、かつデータが正確であれば良いわけで、データベースと文書の間で綺麗にリンクが張られて、しかもそれが素人では変更不可能な形になっていればいい。

素人が一番怖いのは、せっかく出来上がっている文書を壊した挙句、壊れたまままで保存して修復不可能にしてくれたり、壊れたままにしておけばいいものを中途半端な知識でいじくり回して余計な被害を増やしてしまうところにある。

浩樹は、父や叔父に色々教えるより、そういう被害を少なくする方が、結局自分の労力が減るということに気が付いた。なので、今回の休みは、父たちがいいじる文書のあちこちにロックをかけたり、リンクを再チェックしたり必要ならデータベースを分割して使いやすくしたりすることに使うことにしていた。

そういうデータを扱っていると、当然ことながら、コスト管理や出納のデータも目の当たりにすることになる。

見るでも無しに見ていると、経理の知識がない浩樹にも、色々と見えてくることがある。

自分の家がどのような財務状況にあるか、発注主の下請けいじめはどの程度まで進んでいるか、あるいはこれからどのようなようになっていくか、歩留まりに関する製造ライン上の問題点まで、様々なものが見えた。一介の高校生がなかなか触れられない情報である。

こんなんでよくまあ倒産もせずに生き残っているなど感心したり、自分がバイトもせずにもうのうとしていることに罪悪感を持ったりしないでもなかったが、おかげで自分の視野が広がったという自覚はある。

製造や経営に関するデータというものには、現実以外の何物も存在しない。高校生が夢を見る要素など何もない。でかいことを言ったり、地に足がつかない夢を見たりする余地はない。

そういうものを見ていると、世の中の見方というものがわかってくる。

おかげで可愛げ無い高校生が出来上がってしまったが、そういうところが頼りになる、と見てくれる同級生もいないではないし、教師などは多分クラスで一番頼りになる学生だと思っている。

そういう見方がうるさく感じられることもあるが、見下されるの

はもっと嫌だから、まあこれでいいかとも考えていたりする。

朝からそんなことをしていたから、夕方になるといい加減疲れていた。

根を詰めていたのは、今日中にひとつは形にしておきたいと自分なりに目標を設定していたからだ。パソコンのまわりに、今まで買い集めたソフトの解説書などを積み上げ、それと見比べつつ作業している、さすがに目も体も疲れてくる。

国立難関大狙いの身としては、高2の連休をこんなことに費やしていいのだろうかという疑問も無いではない。それ以上に、体を動かさないとこのまま固まって朽ちてしまうような気がした。

浩樹は散歩の趣味は無かったが、少し出歩くくらいのことはしたくなった。

「ちよつと出てくる」

父たちと一緒に工場に入っている母に告げると、買い物任せられた。

「カワハギ、ね」

「それだけ忘れてたのよ」

父たちの晩酌に欠かせない乾き物。実は一番の酒豪は母なのだが、浩樹もカワハギとスルメが無いと大人たちの晩酌が始まらないことは知っている。

買う店は決まっている。商店街にある小さな乾物屋で、今時珍しいほどに昔ながらのたたずまいを持っている店だ。コンビニにしようという話も何度か起きたらしいが、その都度話だけで終わってしまい、今でも父が子供の頃から変わっていないという店構えで商売を続けている。

どうせそんなに遠出する気も無かったから、ぷらぷらとその辺を歩きながら向かうことにした。

浩樹の家は、街中と言っているいい区画にある。田舎のこと、大した賑わいは無いが、それでも友人たちの中では浩樹の家は「街の家」と認定される程度には街の中にある。

もったも、今では住みにくさを示す言葉でもある。スーパーなどは郊外に移転しているし、駐車場が無い商店は次々に看板を下ろしてしまっている。中途半端にマンションが建ったために、変な位置に空き地ができたり、日照権や電波障害などの問題も色々と起きている。

そういう街の中を歩いていて、挨拶を交わしている光景があったら、それは元々この地区に住んでいた住民同士と見ていい。旧住民と新住民がなかなかなじまないというよくある街の課題は、ここにも当然のように当てはまっていた。

浩樹は旧住民の側で、近所付き合いが悪い家庭の出でも無いから、知り合いに行き会えば挨拶くらいはする。

休日ということもあり、観光資源も無い街の中は閑散としていた。かえってぶらりと歩くには都合が良く、乾物屋で買い物を済ませてしまふと、だんだん歩いているのが気持ちよくなってきた。

天気もいい。薄い雲が空を覆っていたのだが、昼過ぎくらいからそれも徐々に取れ、今は風もそれほど無く、沈みかけの日差しはわずかな雲に遮られてまぶしくもなく、外を歩いてとても気持ちがいい。

その心地よさの中に浸りきり、ぼんやりとゆっくり歩いていた浩樹は、ふと、前の方に珍しい物を見つけていた。

着物姿の若い女性の後姿だ。

着物姿そのものが珍しいところに来て、若い女性が着ていることもまた珍しい。成人式の振袖か、結婚式くらいでしか見ない。

ただ、場所を考えれば、理由はわかる。

浩樹自身はまったく興味は無いが、すぐ近くにお茶の先生が住んでいる。弟子が多く、たまに茶会を催するときなど、着物姿が一時に集まって華やぐことがある。街では旧家として知られてもいて、どれくらい旧家かといえば、血筋は江戸時代初期までたどることが出来るという。

それを言ったら、と浩樹は、着物姿を遠くに見ながら連想する。

江戸時代どころか、安土桃山時代や戦国時代をも超え、室町時代から続く旧家なんてのもあったな。

そういえば、その家のお嬢がうちの高校に来たって騒いでたな。名前はなんていったかな。まあ、顔もろくに知らないけどさ。

着物姿の女性は、背が高く姿勢がいい。上品に結い上げた髪が可愛らしいが、着ている着物の色が落ち着いた色調の無地物だったから、浮いた感じはしない。景色の中に悪目立ちせずになじんでいる。それがひどく好感が持てるたたずまいで、浩樹は思わず注視してしまった。

彼女はお茶会帰りに街歩きをしていて、店先で立ち止まっているらしい。何の店の前かすぐにわかり、浩樹は苦笑した。主に紅茶を扱っている店先だったからだ。

そうして徐々に近付いていくうち、浩樹はそれが誰であるか、不意に悟ってしまった。

ろくに見たことは無いが、何しろ有名人だし、一度見たら忘れられないくらい美人でもある。

永野綾華。

中学時代からの不良伝説は高校に入ってさらに加速しているが、浩樹は詳しくは知らない。ただ、評判のうち悪い部分ばかり聞いていると、あのたたずまいは説明がつかないとは思えた。

ただの馬鹿があんなに綺麗な立ち姿になるものか。

旧家のお嬢がお茶を習った帰りの姿が、桁外れに美しかった。

見とれてしまっていたかもしれない。時間の意識もなく、浩樹はゆっくり近付きながら、確かに視線を完全に奪われていた。

そして、彼女が、店先に向けていた視線を上げ、何気なく浩樹の方向に向けた。

二人の視線がぶつかり、絡み合った。

浩樹は目を逸らせられなかった。

上げた髪から襟元に落ちていく肌の白い線が美しい。化粧はせず、無色のリップをぬっているだけらしい唇の妖艶さ。ほっそりした眉

の気丈な線と、瞳が持ったおやかさの絶妙な均衡。

一目ぼれ、というなら、これは一目ぼれだったのかもしれない。すぐに視線は外れてしまった。綾華の方から外してしまったからだ。彼女は人に見られるのに慣れているから、さして気にもしなかっただろう。

浩樹にとっては一大事だった。

今までこんなに一人の女に視線を奪われた経験はなかったし、その美しさに呆然としてしまったこともない。

相手が悪すぎるとはわかっていたが、しばらく、浩樹はこの衝撃から立ち直ることが出来なかった。

という話を綾華にすると、本人にはまったく記憶が無いらしく、

「えー、浩樹に会ってたらその時点であたしだって惚れてないか？」などと訳のわからないことをいう。当時は彼氏もいたし、その翌年には期待の一年生、佐藤晃彦への片思いに揺れたりもしていた綾華に、少なくとも浩樹が入り込む余地はかけらも存在しなかったはずだ。

「まあ、その後には色々と迷惑かけられて、幻滅しまくるわけだけどな」

「その節はどうもお手数おかけしまして」

てへ、と綾華は笑っている。

親友の和馬が、何を思ったか突然生徒会長選に出馬。浩樹が脇を固めてくれるなら、という職員の思惑も重なり、会計で選挙に出る羽目になってしまい、無事当选すると、今度は「生徒会執行部の良心」などといわれて面倒をすべて押し付けられ、あげく、生徒が起こした不祥事の後始末に駆けずり回ることになった。

綾華からも迷惑をこうむっていた。

たいてい、綾華自身の問題というより、綾華に横恋慕したり嫉妬

したりする男女が勝手に騒ぎを作ったものに、放っておけばいいのに本人が悪乗りして騒ぎを拡大再生産してしまった、という問題が多かった。

「いやあ、会長になってみてわかったよ。浩樹って大変な仕事してたんだね」

「出来てなかったから最後にクーデター起こされたわけだが」

「あの生徒会をほとんど一人で回してたんだもん、仕方ないよ。あたしだって、あきちゃんとか由紀がいなかったら絶対無理だし」

和馬が会長職を半ば投げ出してしまったのは、偶然が積み重なった不幸な人間関係の破綻が原因だったが、それ以来浩樹が一人で生徒会を回していたのは誰もが知るところで、クーデターが起きたときでさえ、その首謀者である綾華や下級生たちから信頼され、その新勢力の重要な一画を任されたりした。

「でもそういう浩樹を散々見てたのに、それに惚れないとか、あたしの馬鹿もたいがいよね」

今日はゴールデンウィークの真っ只中。

そう、浩樹が綾華に心を奪われてしまった時期である。それを思い出したから、そんな話をしていた。

浩樹も大学生活に多少は慣れ、綾華も新入生を迎える時期の仕事にひと段落がついて、どちらもほっと一息ついている時期だった。

つい最近、コンパに付き合わされた浩樹が泥酔、家まで女子二人に送られた挙句に雑魚寝して朝を迎えるという大不祥事を起こしてしまい、一時は怒り狂った綾華を治めるのに浩樹と後輩二人で悪戦苦闘したものだが、この日はその反動か、完全に甘えモードに入っていた。

綾華を知る者にとっては意外かもしれないが、浩樹にしてみればそうでもない。綾華は気が強く、態度もでかく、扱いにくい女のようである、二人きりの場面では結構甘えてくる。付き合い初めからそんな感じだったから、そんなものだとは浩樹は思っていた。

「僕のほうは、未だにお前が僕を選んだ理由がわからないけどな」

「えー、なんでよー」

浩樹の部屋で、二人並んで畳の上に座りながら、パソコンの画面を見ていたはずだった。それがいつの間にか思い出話になり、今はパソコンはスクリーンセーバーも越えてモニター電源が切れている。綾華は浩樹にぴったりと寄り添い、頭を浩樹の胸に預けたり上げたり忙しい。浩樹の腕は綾華の肩を抱いていて、これをわずかでも外そうものなら怒涛の抗議が来るから動けもしない。

「あきちゃんもそうだけど、なんであたしの周りの男どもは、どいつもこいつも自分を過小評価するかなあ」

「お前が桁外れだからだろう。お前と並んで、自分に自信持てとか、ただサドな要求だよ」

「サドじゃ無いじゃん、普通に自分に自信持つてよ」

「無理。悪いけど、お前に水準合わせたら、まともに張り合える男なんかいないからな。そこは自覚しとけ」

「えー」

綾華は不満げに頬を膨らませた後、浩樹の胸に顔をうずめるようにした。

「……ふごふが」

「言いたいことがあるなら顔を上げてから言え。服に口押し付けたままじゃ何言ってるかわからん」

「ふがが」

ノーメイクでも無いくせにこういうことをするから、外に出ようとすると着替えを余儀なくされることが多い。まあ、今日はノーメイクだが。

「あたしなんてそんなご大層な女じゃないってば」

「自覚を持ちなさい。お前がその気になったらどれだけの男を転がせるか」

「転がす気なんか無いし」

「それはわかってる。転がす気があったら、僕の腕の中でぶーたれるなんてことにはならないだろうしな」

「居心地いいんだよね、浩樹の隣って。抱かれながらぶーたれてるのって気持ちいい」

「妙なところに快感を求めないようにな」

「妙じゃないじゃん、油断しまくって抱きついてるのが気持ちいいっただけで」

綾華の油断しまくった顔は、凶悪なほどに可愛い。浩樹にしてみれば、それを知ってしまったら、他の女になんか目が行くはずがない。

「ほんと、かわいいよ、お前は」

そういうと、浩樹は綾華のあごに指を添えた。

その目がどこまでも優しく、綾華の心を芯から揺さぶってくれるのだが、浩樹自身にはまったく自覚がない。さらに言えば、綾華にかわいいという、その声の、あるいは口調の優しさも、綾華の想像力の限界を超えている。

浩樹の指に導かれるまま、綾華の唇は浩樹のそれで塞がれた。

舌先が触れ、互いに互いの感覚を求めて深く続けていく。

1分以上も激しくキスをした後、浩樹が一度軽く唇を離す。それからは一転して優しい口付けになった。唇が触れるか触れないかの感覚で、ささやくように唇を震わせながら、キスを続けていく。

浩樹の手が綾華の髪を優しくなでている。

綾華の両手は浩樹の背中に回り、そっと上下していた。愛撫、と
いいといい。

「……今度、着物でデートしてみる？」

綾華がキスしたままささやいた。浩樹が一瞬唇の動きを止めた。それでも頭をなで続けているのはさすがというべきか。

「……隣を歩くのに何着たらいいんだよ」

「……着物……一緒に」

そういうと綾華が唇をぎゅっと押し付け、すぐに離し、くすりと笑った。100人男がいたら、98人まではこの笑顔で落ちるだろう。1人くらいは変人がいて反応しないだろうし、1人くらいは女

には興味が持てないだろうから。

「着たこともないのに」

「だからデビューするんじゃない。女の着付けより簡単だよ」

「持ってないし」

「あたしが準備するよ。仕立ててない反物なんか、たんす探せば売
るほど出てくるし」

「仕立てるのだってお金かかるだろ。お前持ちで自分の着物作ると
か、僕は嫌だよ」

「大丈夫。あたしには被服部に強烈なコネがある」

「ああ……ショーでモデルやるとかいふ」

「そう。あれをダシに脅したら、着物の1枚や2枚、確実に縫って
くれるね」

「あれって難しいんだろ？ 高校生に出来るのか？」

「紋付ならともかく、普段着の単衣ものなら大丈夫だよ。顧問は和
裁士だし、いざとなったら頼み込むわ」

綾華はどうしても着せたいらしい。

確かに、浩樹が綾華に最初に惚れたのは、あの着物姿だった。あ
れと一緒に歩けるのなら、着物くらい挑戦してみても悪くないかな
などと思えてしまった。

それがどれだけ目立つか、まで考えが至らなかったのは、浩樹が
うかつだったからではない。もともと、綾華と一緒に歩いていたら
どうしたって目立ってしまうのだ。気にするだけ無駄というものだ
った。

「お茶は習わないぞ、先に言っとくけど」

「……ちっ」

以前から綾華は浩樹にお茶を習わせようと画策している。どうも、
浩樹には和が似合う、と勝手に思っているらしい。この着物デート
計画もその一環なのだろう。

「けち」

「習い事は金がかかりすぎる、とくに日本の芸事はな。んな余裕は

無いし、習い事してる暇があったらお前と一緒にいたいし」

「あー、痛いところつくよね」

綾華が再び顔を浩樹の胸にうずめる。

「あたしもいっぱい一緒にいたい」

そういうと、ぐるぐると頭を振るようにして甘えてきた。

「何だよ、猫かお前は」

「ふにゃー」

「完全にキャラが違ってるぞ、普段と」

「ご不満ですかにゃー」

「不満じゃないけど……薄気味悪くはある」

「ひどーい」

今、二人は、こういう仲である。

4. 1 綾華1 (前書き)

以前もらっていたリクエストが、他の方からも来ましたので、書きます。相変わらず割ける時間は皆無に等しいのですが、今書かなきゃお盆まで書けない気がします。

4. 1 綾華 1

なにしろ盛大にふられてしまったので、今さらどんな顔をしてあきちゃんに会えばいいのか、結構厚顔に出来ているはずのあたしでも、少しは悩んだ。

ふられた直後は良かった。だって文化祭の真っ最中だったし。

あたしもあきちゃんも、文化祭を背負ってた。途中で由紀の優柔不断に腹が立った挙句、ぐだぐだの展開になっちゃったけれど、まあ、それ以外は仕事に追われていた。

あきちゃんは見えていらつくくらい、仕事に私情を挟まない。あたしをふったくせに、仕事では平然としていた。こっちだって、周りに悟られるなんて死んでもごめんだから、絶対表面になんか出さなかったけれど、あきちゃんほど徹底できてない。

それでも、あたしは頑張った。自分でも頑張ってたって思う。

問題は、文化祭が終わってしまったあとだ。

後片付けなんてものは一日あれば終わるし、来年のために丁寧にやっておきたいね、なんて在庫管理に精を出したって、あきちゃんに由紀、浩樹先輩がいれば、これだけやっときゃ来年の生徒会はやること無いんじゃない？ と思えるくらいに完璧な仕事になる。

要するに、あたしはあつという間に手持ち無沙汰になり、あきちゃんに見事にふられて砕けたという現実に立ち向かわなきゃいけないっていた。

これで、あきちゃんや由紀を嫌いになっただけじゃ、いっそ楽だったかもしれない。友達相手にぐだぐだ文句をいって、愚痴って、そろそろその友達にも見向きもされなくなる限界ってところで気持ちの踏ん切りをつければいい。

それが出来ないのがつらいところ。何しろ、あきちゃんも由紀も、基本あたしのことを好きでいてくれるし、どっちも「大丈夫なの？ アホの子なの？」とこっちが心配したくなるくらい素直だった。

あの二人を嫌いになるのは、多分、嫌いになる方の人格に問題がある。

自分のため以外のところでは策略をめぐらしたり先読みして先制攻撃したりするのが得意なあきちゃんも、自分のことになるとびっくりするくらいバカ正直になる。

女の「素直でいい子」なんて外づらが信用できるはず無いだろう、というあたしの信念は揺るがないけれど、由紀だけはその例外なんじゃないかって思える。

どちらも自覚の無さを三日三晩問い詰めてやりたくなるくらいに自己評価が低くて、歯がゆくなる。

その歯がゆさまでもがあたしには快感だった。

今まで、ビッグマウスなだけで何も出来ないバカか、ただ卑屈なバカか、そばにいる誰かの力を自分の物だと思い込むバカくらいしか付き合いがなかったから、そういうバカが100人束になったってかなわないような能力を持っているくせに、その事に気付いていないらしいバカ二人の存在が、あたしには嬉しかった。

そういうようなことを二人にいったら、どっちも微妙な顔をしていた。褒められたと受け取っていいのかどうか、迷ったらしい。

あたしなりに最大級の褒め言葉のつもりなだけだな。

「それをいうなら」

と、苦笑交じりにあきちゃんがいった。

「もつとバカな人がいるじゃないですか」

「誰よ」

「浩樹先輩ですよ、もちろん」

生徒会会計として、無責任の代名詞になってしまった会長の穴を塞ぎ、ほとんど一人で生徒会を切り盛りしていた人。

そんなことは私だって知っていたわけで。

なぜ先輩を「浩樹先輩」と名前呼びするかといえば、あきちゃん

と一緒に理由。この近辺に掃いて捨てて燃やしてもまだいるくらい多い佐藤姓なんだ、この人も。

なぜ知っていたかといえば、文化祭実行委員で顔を合わせる度に「あいつがなあ」と感慨深い顔をされてむかついたんだけど、そういう顔をされてしまうくらい、先輩には迷惑をかけていた。

たとえば今年5月の校内球技大会での乱闘事件。

あたしが乱闘を起こしたわけじゃないけれど、起きた理由があたしだったという話。

思い出しても馬鹿馬鹿しい事件だった。3年と2年にそれぞれあたしに惚れてたらしい男がいて、そいつらのクラスがたまたまサッカーで対決。試合中にふとしたきっかけで乱闘勃発、二人は連行。主催者の生徒会が追及したところ、原因があたしにあると判明。で、あたしは呼び出されて事情説明するように求められた。

求められたって、知らないつつの。どっちも可憐な片思いだったらしいんだから。

で、知らないもんは知らない、と突っぱねて帰っておけばいいのに、あたしは暴走した。

勝手にあたしをめぐって喧嘩なんぞをしたバカの顔が見たくなり、隔離されている二人に会い、それぞれの言い草に腹を立て、それぞれに相手を蹴っ飛ばしてしまった。

周りにいた生徒会役員が止める度胸も持っていない腑抜けだったのも悪かったけれど、この腑抜けども、黙って見過ごすだけにしてあげばまだいいのに、わざわざ教員にちくるという最低なことをしてのけた。

いつの間にかあたしの暴力事件に発展したこの事態に、一人だけ、「バカのバカ騒ぎにまともに付き合っていないらるか」という表情を顔に貼り付けたまま、めんどくさそうに対応してくれた生徒会役員がいた。

それが浩樹先輩だった。

文化祭準備の最中、ちょっとした待ち時間があって、このことを

話したら、浩樹先輩はちゃんと覚えていた。

「あれか。あの時はまじで迷惑だったもんな」

と本人を目の前にして思いっきりいってくれた。

迷惑だよなあ、そりゃ、と今なら思える。

大会とか祭とか、運営するのってかなり大変だ。その最中に乱闘事件を起こされるとか、嫌がらせかって怒鳴りつけたくなるレベルのうざさだ。

浩樹先輩は、あたしをかばうというより、こんなバカな事件は無かったことにしておきやいいじゃないか、誰に迷惑がかかる話でも無し、という線で押し通し、うやむやのままに事を収めてしまった。体育の授業中ならそうはいかないけれど、球技大会中は学校側も責任がはっきり分担しきれていない。その隙間を狙ってうやむやにしたあたり、あきちゃんがいうには「悪徳官僚並みの手際の良さ」だそうだ。

残念ながら当時のあたしはまだあきちゃんや由紀に出会う前だったから、心の余裕も無ければ、自分とは違う場所で生きていると思っていた「真面目な人々」のことを認める気なんかさらさら無かった。

なんか問題にする気無いみたいね、ラッキー。その程度にしか思わなかった。

浩樹先輩が、関係者全員にとって悪くない結論に持っていくために、立場的にすれすれなことをやってのけていたこと、今ならわかるけれど、当時はわからなかった。わかろうとしなかった。

「その節は失礼しました」

思わず謝ったら、先輩は笑っていた。

「それがわかっただけでも大したもんさ」

すぐく上から目線の言葉に聞こえるけれど、この先輩はあたしなんかよりよっぽど大人で、格好良かった。

あきちゃんという。

「浩樹先輩は一人だけ飛びぬけて大人なんですよ。視野が広くて地

に足が着いてる。物を斜めから見ている感じが、いいと思ってる、醒めたふりをしてるなんちゃって大人なバカとは根っこから違う」

その通りだと思う。

「しかもその自覚が無い。自分もみんなと同じガキだと思ってる。綾華さんがさつきからいってる、自分の能力に気付かないバカの代表格でしょ」

うん、あたしもそう思う。

文化祭のラストで浩樹先輩や会長にはめられて、あたしは次期生徒会長立候補を全校生徒の前で宣言する羽目になった。

あの空気で「いやだ。絶対やんない」とか言いえないでしょう、いくらあたしでも。

文化祭実行委員会の取り組みやクーデター以降のめまぐるしい忙しさの中で、みんなと必死こいて、無様もさらしながら働いて、何かを作り上げるためにやっていくことの楽しさを知ってしまったから、会長を引き受けること自体は、どうしても嫌な事じゃなかった。でも条件がある。

文化祭の騒ぎがひと段落したある日、あたしは三年生の教室に乗り込んでいた。

現生徒会執行部は文化祭が最後の仕事で、それが終わると、新執行部を選出するための選挙までに引継ぎの資料を作るくらいしか仕事はなくなる。だから生徒会室に行っても誰もいない場合が多い。

進学校のうちの学校、三年生の教室は、受験の追い込みの時期に差し掛かっていて、今まであたしが関わってきた殺気とは違う意味での殺気に満ち始めていた。

あたしが入っていても、大げさに騒ぐような声はなかったし、誰に会いに来たのか、という視線も感じることは無かった。

ひとつには、あたしが会う相手なんかこの教室に一人しかいない

って事が知れ渡っていたってこともある。

会長立候補を宣言させられた私が、前執行部のすべてを握っていた浩樹先輩に会いに来るのは、来ないことよりよほど自然だった。

「来たか」

机に向かってノートをまとめていた浩樹先輩が、目の前まで来て無言で立ち止まったあたしに気付いて、ちらっと視線を上げていった。

「待ってたってわけ？」

シャーペンの芯をトンと引っ込めた浩樹先輩に、あたしは返す。少し意地悪な言い方をしたつもりだけれど、先輩は簡単にうなずいた。

「待っていた。いつ来るかはともかく、来るのはわかりきってるかな」

「じゃあ自分から会いに行こうとかは思わないわけね」

ちよつとムツとしながらいうと、先輩はさっさとノートまで片付けて顔を上げた。

「お前を追いかけるより、お前が追いかけてきた方が効率がいいだろう。僕はたいてい同じところにいるけれど、お前は無駄に動きすぎる」

その通りだからとっさに反論も出ない。

「……お前っていうな、んなに親しくしてるつもり、無いぞ」

だから、そんな憎まれ口が出た。

怒るかな、と思った。今さらだったし。あたしの問題行動に巻き込まれているうちに、先輩はあたしをお前呼ばわりするようになった。去年からの話だ。

先輩は怒らなかった。無愛想なあたしの口調にびびりもしなかった。

「そうだな。悪かった」

ごくあっさりと謝ると、立ち上がった。

「場所を変えよう。手元に生徒会の資料が全然無いんだ、話になら

ない」

そういう話をしに来たんじゃない、といいかけて、あたしは停止じゃあ、何しにきたんだよ。

自分で自分に突っ込んでしまった。

先輩の顔を見た途端、それまでは会長候補になんぞしてくれた先輩への恨み言でいっぱいだったはずのあたしの頭の中に、とんでもない相談事が浮かんできていた。

ねえ先輩、あたし、どんな顔してあきちゃんに会えばいいのかな。由紀に会えばいいのかな。いつもどおりなんて、あたしに出来るのかな。

なぜこいつに訊くって発想が！

心の中の嵐を顔に出すにはあたしはひねくれすぎていて、たぶん、すごいむっつりした顔をしていたと思うけれど、先輩は気にもせず歩き出した。

「生徒会室に行こう。どうせ今日は使っていないだろうし」

4. 2 浩樹 1

永野の様子が変なことくらい、すぐに気付いた。

なんというか、余裕が無い。

問題行動ばかりのくせに成績が良く、校外の大人たちの受けもいい永野だから、自分が落ち着いている、あるいは余裕がある、というカモフラージュをすることなど、お手の物なはずだった。

その永野が、どこか張り詰めた顔をしている。ムツとした顔をして、生徒会長に仕立て上げられつつある現状に不満たっぷり、という雰囲気をもってはいるものの、一枚幕をめくると、どうもそういう理由からじゃないらしい緊迫感が伝わってくる。

僕もエスパーじゃないし、永野とは先代生徒会会計としての付き合いしかない以上、なぜそんな空気を彼女がまもっているか、勘付く事は出来なかったし、訊くことも出来なかった。

訊く気も無い。

興味が無い、というわけじゃない。永野という、この特異な存在、強烈なまでの美少女でありつつ、その見た目の印象が吹き飛んでしまふほどにさらに強烈な個性の持ち主である少女に、興味がまるで持てないというほど朴念仁だという気は無い。

ただ、大して縮まっているわけでもない距離感を自分からぶち壊し、そばに寄り添っていくような蛮勇とは、僕は無縁だった。そういう勇氣も度胸も僕には無いし、それを持たなければいけない理由も無かったからだ。

いくら魅力的な女でも、高嶺の花過ぎるし、佐藤晃彦に片思いしていたらしい気配も感じていた。そんな面倒な女にわざわざ近付いていく理由は、少なくとも僕には無い。

「生徒会改選は来週末だったな」

生徒会室のひんやりした空気を感じながら、僕は入ったばかりの部屋の空気を震わせた。多分、いつも通りの、誰も感動させないつ

まらない声でしかないはずだ。

永野は僕の後から生徒会室に入り、意外に丁寧に扉を閉めた後、応えた。

「金曜日の放課後ね」

「昨日の今日で準備も何も無いだろうけれど、進んでいるのか？」

「なーんにも」

永野はうんざりした顔で両手を挙げた。万歳、降参。

「だよな」

僕は調子を合わせるように苦笑した。

「準備っていったって、何すればいいのかわかんないし」

「それを訊きに来たんだろう？」

いつの間にか生徒会室での僕の指定席になっているいすに座りながら、永野の姿を改めて見る。

うん、とうなずきながら、近くのいすを引いているその姿には、いつものような傲慢なまでの自由さは感じられない。

「とりあえず何すればいいか教えてよ」

「公示日が明日だからな。立候補に必要な推薦人三人の署名を添えて、選挙管理委員会に立候補の届出書を出す。要は明日の放課後、この部屋に三人仲間を連れてくれば、書くもの書くだけで手続きは終了」

「それで？」

「それだけ」

「それだけ？ まじで？」

永野が驚いている。

「手続きとして最低限必要ってのは、実はそれだけなんだよ。ポスター掲示は権利であって義務じゃないし、立会演説会の参加は強制だけど、べつに『よろしく』の一言で悪いわけじゃないから、演説原稿が必要なわけでもない」

「へー」

結構本気で感心している声だった。

「当选してしまえば、やるべき事が津波みたいに押し寄せてくるさ」
「そりゃそうだろうけど」

といいつつ、永野が脚を組んで、テーブル上にひじを乗せてこっちに身を乗り出すようにした。

「で、実際、やった方がいいことって何よ」

そういった永野の目は、多少不自然な感じはしても、仕事モードに入った時の色に見えた。

そういう目をしてきている方が僕は話しやすい。

「まずは幹部クラスのスカウトだな。めぼしい連中を立候補させないと、放ついても立ち上がるって連中じゃないだろうし」

誰のことをいっているか、永野はすぐに察した。

「そうね。尻蹴っ飛ばしてでも立候補させないと」

佐藤と渋谷、それに文化祭でクーデター後に実行委員の中核を担った連中のことだ。残念ながら、自分から「はいっ」と手を上げるような顔ぶれじゃない。

「それから、そいつらを使って、まずはポスター作りだな。資材は必要なだけ申請すればもらえるけど、白紙に名前ってだけじゃつまらないだろう」

「それってありなの？」

「ありはありだけど、多分先生から横槍が入るだろうな。頼むからもっとまともなの作れって」

「だよね」

「それから掲示計画書。校内の見取り図をもらって、そこに掲示する場所を書き込んで提出する。で、その通りに貼ったら、選挙公約作りだ」

「それって必要？」

「体裁だけでもあった方がいい。出来れば今週中に作って、学校側の承認をもらっておくといい」

「めんどくさそう」

「めんどくさでも、ここで心証上げておくと、公約守るために必要っ

て理由で色々と便宜を図ってもらえたりする。後々楽になるぞ」

「公約なんてわかんないよ」

「君が考える必要は無いさ。そのために幹部クラスをスカウトするんだ」

「ああ、なるほど」

会長が何もかもやる必要はない。リーダーは、リードしていくのが役目であって、できる奴に仕事をふっていけばいい話だ。

「それから、演説の草稿作り。これも出来る奴に作らせて、後で自分が読みやすいように実際の実稿を作る」

「それはもう、あきちゃん、に、書いてもらおう」

「それが一番だろうな」

うなずきつつ、僕は少し違和感を感じた。あきちゃん、という言葉葉を口にした瞬間、永野の表情に「しまった」という色を感じていた。

なんだろう。

「……佐藤を執行部入りさせるのは嫌か？」

思わず疑問が口をついて出た。

永野は口を閉じ、少し黙った。目が、いつの間にか鋭くなっていた。

「……どうしてそう思うの」

「いや」

僕は地雷を踏んだのだろうかと思っただけで、踏んで困る地雷がある自覚も無かったから、とりあえず開き直すことにした。

「そんな風に見えたからさ」

「見えたか」

「見えたな」

「見えちゃったか」

「見えた」

永野はしかめっ面になった。

「素直にさ」

と、永野はひじをテーブルから離し、いすの背もたれにうずもれていくように身を沈めた。

「才能とか力とか考えたら、あきちゃんしかいないんだよね、あたしの側近役って。わかってるんだけどね」

「……認めたく無い理由もあるわけか」

「察しはつくでしょ、先輩なら」

永野はじつと僕を見た。

はぐらかしたら、たぶんこいつは一瞬で僕を見限るんだろうな、と思った。

それでもいい、という気もしたけれど、ここは一応、信頼されている先輩役を続けることにした。

「大体はな」

軽くうなずいて見せた。永野はつまらなさそうに続けた。

「先輩から見ても、あたしとあきちゃんってどう見えた？」

それは、さりげないようでいて、かなり重量級の問いかけだった。こいつ、僕を試していやがる。

中途半端にはぐらかすならそれまでの男、つまらない見方をしていることを暴露しやがったら見限ってやる、くらいのことは考えていそうだ。

「どうって」

一瞬、僕は考えた。どっちに進むべきか。

自分が感じていたことをストレートに表現するか、気の利いた言葉で話の方向を変えていくか。

すぐに答えは出た。佐藤じゃあるまいし、僕に話をごまかしていく能力は無い。

「佐藤は器用なんだか不器用なんだかわからん奴だが、少なくとも筋は通す奴だ。渋谷を大切に作る以上、君のことをきっぱりとふたって所だろう」

「なんだ、ばればれかよ」

永野がふっと笑った。苦笑、という以外に表現のしようもない笑

い。

「あきちゃんがあたしに惚れてたとかいうストーリーは浮かばないわけ？」

「相手が君じゃ、佐藤は持て余すだろう。永野は彼女にするにはいい女過ぎる」

別に褒めたつもりは無かった。本音だ。

あまりにもいい女は、普通の男の手には余るはずだ。ましてあれだけ冷静に彼我の実力を測りきれるような男なら、永野綾華という女を手に入れるリスクのようなものを、冷酷なほどに計算するだろう。それが無意識でも。

そういう奴だ。だから、文化祭の中心で、あれだけの仕事を平然とやってのけた。

「あきちゃんはいいい男だよ。大人だし。あたしくらい、支えられるでしょ」

「無理だろうな」

僕は断言した。永野はムツとしている。僕は続ける。

「理由は簡単。あいつ、自分を過小評価する癖があるだろう。あれはもう性格だからどうしようもない」

うんと永野がうなづく。佐藤の過小評価癖は誰もが感じていることだ。

「あいつが仮に君と付き合うことになったとして、毎日のように自問自答しちゃのた打ち回ることになる。自分がこの人と付き合えるだけの人間かよ、俺にはそんな器はねえよ、とか何とかいって」

僕がいうと、そういつてのた打ち回っている佐藤の姿の想像がついたようで、永野は渋い顔をした。

「そういう佐藤に、君もいらいらさせられたり、悔しさすら感じたり、暗い感情にいつもつき合わされて疲れることになる。そんなのが見えてたら、佐藤は絶対に君の中に踏み込んでいくようなまねはしないさ」

我ながら偉そうに他人の感情を代弁している。実際にそれが当た

っているかどうかはわからないが。

それでも、永野には僕の表現が痛かったらしい。

「……そうなんだ。そういう子だから好きになったんだけど、好きでいれば報われるような恋にはならないんだよね」

つぶやくようにいうと、永野はため息をついた。

生徒会室の空気は、季節以上に冷たさを感じさせ始めている。

4. 3 綾華 2

たぶん、恋愛話とかぜんっぜん縁が無いところで生きてるんだろ
うな、この人。

あたしがそう思ったのは、先輩がものすつごく話しくそうにし
ていたからだ。大抵の話は淡々とこなすこの人が、いちいち考えな
がら話している。

そのくせ、いちいち人の内心を見てきたかのように分析してみせ
るあたり、あきちゃんにそっくり。

しかも、その分析が的確に思えるから困る。

「いずれは君だろうが誰だろうが、どんい女にも見劣りしない男
になるだろうけど、まだ早い」

その顔を見て、思わず、意地悪をいいたくなった。

「あんたはどうなんだよ、先輩」

あたしの切り返しに、先輩は無表情なままじっと目を見返してき
た。

意外。

途端におろおろするか、視線を外して戸惑うか、はぐらかすかす
ると思ってたのに。

しばらくして、先輩が口を開いた。

「……考えたことが無かったな」

「あたしじゃ恋愛の対象になんかならなかった？」

「というより、僕が誰かの恋愛の対象になるとか、考えたことが無
かった」

「……まじで？」

なんだこいつ。

高校生ってさ、もっと、こう、恋とか性とかにガツガツしてるも
んなんじゃないの？

少なくともあたしの周りの男はそうだったし、そういうのが薄い

なって思えたあきちゃんだって、あたしのアプローチにおろおろしたり過剰反応したりしていた。

男の視線はいつだって女を追っているし、そういう視線に全身なめ回されるのは女の宿命だと思っていた。胸や脚を見るとき男の刺すような視線なんて、四六時中感じてる。あたしだからじゃなく、大抵の女なら、男のそんな視線に常にさらされているのに気付いてる。

この先輩は本気でいってるんだろうか。

「女なんて黙ってても寄ってくるでしょ」

「そんな男なら、とっくに彼女が出来てると思うんだけどな」

「いないの？」

「いたためしがないな。告白も、したこともされたこともない」

「まじで？ あたしに嘘ついてても何の得にもならないよ？」

「君相手に嘘をつくかよ」

お前、という呼び方は一切しないことにしたらしく、先輩は律儀に「君」と呼んでいる。その顔はずっと無表情で、怒っているようにも、面白がっているようにも見えない。

「あきちゃんもそうだったけどさ、あんた達の周りの女って本当に見る目が無いんだね」

あたしは本気で呆れていた。

先輩は、ルックスが悪いわけじゃ、絶対に無い。めがね君っていう時点でダメ、とかいう女ならともかく、温和な顔立ちはクールな話し方をしていてもどこか優しく、整った横顔なんかアイドルグループに入れても食べていけるレベル。

文化祭と一緒にやっててめちゃくちゃ頼りになったくらいだから、仕事も出来るし、みんなの信頼も集めていた。怒らず騒がず、冷静沈着。何が起きても誰が相手でも落ち着いていて、あたしやあきちゃんがパニックになっても、さりげなくサポートしてくれた。そのさりげなさが大人を感じさせてくれて、あきちゃんの明るさは無いけど、包容力は圧倒的にこの人の勝ちだった。

その端正な顔に表情を浮かべることなく、先輩は小さく首をかしげた。

「でも、ないだろう」

本気だ。こいつは本気で不思議がっている。

「運動が出来るわけでも、面白い話をするわけでもないし、この通りの性格だ。とっつきにくくて話しかけにくいって噂なら何度も耳にしている」

「そういう男もかっこいいでしょ。それがわからない女なんて相手する必要も無いんだけど、それにしたってさあ」

あまりにも自分の魅力に鈍感な男だから、こっちがむきになっちゃう。

「てか、あんたが本気になったら、大抵の女は落ちるって。そういう相手っていなかったわけ？」

自分が身を乗り出していることに、いつている最中に気付いたけれど、戻す気にもならない。

先輩はまた小さく首をかしげた。

「……そういわれると……まあ、女の子を好きになったって経験は無いかな」

「うっそ」

ありえない。ありえない。

「気になる子くらいはいたけど、本気で好きだったかと聞かれると、あまり自信は無い」

「その気になる子とさ、それ以上仲良くなろうとか、無かったわけ？」

「仲良くなるも何も、いつだって向こうがこっちに全然興味なかったからな」

淡々。

「あんたが気づかなかっただけでしょ、それ」

「そうなのかな」

先輩はふっと小さく笑った。メガネの奥の目が少しだけ柔らかく

なる。

「あまり、人が自分をどう見ているかとか、考えないようにしているからかもしれない」

「考えようよ。考えすぎてもどうかと思うけど、考えなかったら自分磨かないダサ男一直線だよ」

「そういうものか」

「女だってそうだもん。人目にしない女なんて最悪だよ。ルックスも、性格も」

「まあ確かに、男だってそうだな。わかった、ちょっとは気にすることにする」

「そうしなよ、もったいないって、せっかくのいい男なのに」

あたしがそこまでいうと、先輩は苦笑していた。

「……なによ」

「いや……いってることがまるでおばちゃんだと思って」

「あたしを捕まえておばちゃんとか、いい度胸してんじゃないの」ニヤリ、と笑ってやると、先輩もニヤリ、と返してきた。

「おかげさまで文化祭の間、さんざん鍛えられたからな」

自分が恋愛脳だとは思わないし、恋愛が一番大事なものだとかいう気はさらさら無いんだけど、浩樹先輩のあの淡白さには驚いた。まじで。

あきちゃんの場合は自分に自信が無いからがつついてなくて、それがすごく新鮮に写っていたけど、浩樹先輩の淡白さは「本物」という気がした。

この人、本当に恋愛に興味が無いんだな。

そんな男もいるんだ、という驚きは、そのまま、この人そのものへの興味に変わっていった。

あたしは先輩の助言どおり、まずはスタッフを口説き落とすところ

ろから始めた。

全員を口説くのは非常にめんどいので、あたしは効率重視で行くことにした。

「で、俺っすか」

「うん、あんたなわけね」

最初のターゲットはあきちゃん。

どんな顔して会えばいいか、なんて悩んでたのが嘘みたいだった。やる事ができて、あたしは何か吹っ切れていた。

あきちゃんは基本的に楽観主義な人だから、振った相手が目の前に現れても、あたしの方が気にしてないようなら、振ったことをいちいち気にするような子じゃない。

「あんたが立てば、他の連中だって立つでしょ。ってより、あんたが立たなきゃ、あたしがどんだけおだてても、他の連中は立たないわ」

「そうですかねえ」

あきちゃん是不審そうにいつているけど、隣で由紀が「うんうん」とうなずいている。

「なに、納得なの、由紀的には」

あきちゃんがそれに気付いて由紀を見ると、文化祭の途中から女としての脱皮を始めていた由紀が、熱心な目であきちゃんを見つめていた。

「みんな、晃彦くんが仕切ってくれるなら出るっていうと思います」

「あたしとあんたと由紀はワンセットだもん。あんたが出なきゃ、

誰があたしの暴走を止められるっていうのよ」

「自分で暴走といいますか」

「認めたくはないけど、残念ながら事実だしねえ」

自分でも、自分が突っ走ったら大変なことになることくらいわかってる。あたしには、絶対に手綱を握ってくれるパートナーが必要だ。あきちゃんや由紀のような。

「だいたいだね、あんたに拒否権は無いんだよ、最初から」

「どうしてですか、綾華さんの命令は絶対って事ですか」

「違う。あんた、あたしのいうこと、絶対だなんて思っていないじゃん」

「そりゃそうですが」

「でも、由紀の『出て出て』攻撃に耐え切る自信、ある？」

二人で同時に由紀を見た。

その瞬間まできらきらした目であきちゃんを見ていた由紀は、いきなり二人の視線を受けて凍り付いていたけど、あきちゃんはあたしのいいたいことは理解したらしい。ため息をついていた。

由紀は、仕事をしているあきちゃんが好きで、それを自分が少しでも支えられたら幸せ、一番近くで見たいられたら至福、という子。あきちゃんが生徒会執行部選に推されていれば、全身全霊で応援するに決まってる。

そしてその目に、あきちゃんは弱い。

「……わかりましたよ、どうせこうなるだろうとは思ってましたし」諦めたように、あきちゃんはまだ一度ため息をつく。

それがちよつと由紀を弱気にしたらしくて、あきちゃんを氣遣うような視線になる。

でも、そのため息と共に出てきたのは、ただの諦めじゃなかった。あきちゃんのあきちゃんたる所以。

「選挙公約の草案と会長候補演説原稿の叩き台、ついでにスタッフ候補の概要までは出来てます」

カバンから出てきたのは、汚い字でまとめられた、選挙に必要な文章の数々。

「おぉー」

「すごいです」

さすがでした、この男。

「全部はやってませんよ、時間も無かったし。これまとめ直して、選挙ポスター作っていきましょう」

「すげーすげー、ここまでやってあんなら、後は他の連中でどうと

でもなるよ」

いきなり見通しが立ってしまって、しかもあきちゃんがあきちゃんらしい見事な仕事振りをを見せてくれて、あたしは本気で嬉しくなってきた。しまった。

4. 4 浩樹2

永野に、「気になる子はいた」といった、その言葉に嘘は無い。町工場の息子、浩樹という小僧がここまで生きてきて、いくらなんでも気になった子すらいなかったといったら、どんな変人だよということになる。

ただ、好きになっていたかといわれると、首を傾げなくなるのが本音だった。

好き、という感情がはつきりと自分の中で育つほど、相手に近づけたことがなかったし、自分から近付こうとしたこともない。近付きたいと強く願ったこともない。

願いたくなるほど強い感情に捉われてみたい、という憧れのような感情はある。恋に恋する、というやつだ。ただ、その程度が、多分僕は薄いのではないかと思う。人より、感情を表に出していくのが苦手なのかもしれない。

そういう自分をいちいち永野に説明するのが嫌だったから、あえて話を逸らした。

「あまり、人が自分をどう見ているかとか、考えないようにしているからかもしれない」

それは嘘じゃないけれど、恋愛の話というより、生き方の話だ。恋愛の話を、あまり永野とはしたくなかった。

自己分析なんか必要ない。

単純な話だ。

永野は、いい女過ぎる。

女として認識したくなかった。してしまえば、僕は口もきけなくなる。

そういうことに、永野は鈍感だった。平気でこっちとの距離感を縮めてくるのがやりきれない。

自意識過剰な自分を、見たり感じたりするのが嫌だった。その感

情自体が自意識過剰の結果だという事実も、僕にはプレッシャーだった。永野が無造作に詰めてくる距離感は、そのまま僕にとってはプレッシャーだった。

仕事の場合はいいい。仕事のパートナーとしては、自分には無い統率力や実行力を見ているのが小気味良く、それを支えられるのは楽しい。

一步でも仕事を離れたら、永野のそばにはいたくなかった。視界の中に入れたくなかった。

マイナスな方向にどろどろしている自分が、嫌で仕方が無い。

こんなに情け無い人間だとは、自分でも思ってもいなかった。それに気付かされたおかげで、多分永野には想像も出来ないことだろうが、こっちはもう、ぼろぼろになりつつあった。

それを見せたくないから、僕は徹底的に先輩面を続けることにしていた。余裕を演じ続け、演じきり、やがて終わる生徒会改選を機に、永野から逃げ切ろう。そう決めていた。

ただでさえ、こちらは受験生なのだ。恋愛沙汰など、ご法度に決まっている。まして志望校は国立難関クラス。そもそも生徒会に関わっていること自体、進学校としての立場を重視している教師などからすれば、いい目では見られないことだった。

永野に片想いするなどというぜいたくが、僕に許されるわけもなかった。

だから、永野と二人きりで生徒会室で話し合ったその夜、久しぶりにあの記憶がそのまま夢に出てきたとき、僕はひどく混乱した。着物姿の永野を見かけ、目を奪われた、あの日の記憶。

夕方の散歩中、お茶の稽古の帰りらしい永野が、柵外れに美しいたたずまいを見せながら、イングランド趣味の紅茶店の軒先で商品を眺めていた。

思わず奪われた視線の先で、永野は不意にこちらを見た。

一瞬絡んだ視線が、永野の方からついと外された、その瞬間に、僕は飛び起きた。

まるで悪夢のようだった。

起きた瞬間、僕は大きく肩で息をしていた。跳ね上げた布団がベッドからずり落ちかかっている。

しばらく、僕は完全には意識が戻らないままに呆然としていた。やがて意識がはっきりしてくると、なぜそこまで自分が取り乱しているのかわからず、僕は頭をかきむしり、ぶんぶんと振り、ベッドから出た。

11月も中旬になれば夜は寒い。暖房なんかとつくに落としているから、部屋の夜気は冷たい。にじんだ汗がやけにひんやりと感じられて、僕は着ていた長袖のTシャツを脱ぎ捨てた。

肌を刺すような冷たい夜気、体の内側から沸き上がってくる不快な熱、僕は体から湯気が出ているんじゃないかと想像したけれど、自分の手すらまともに見えない暗闇の中では、それも確認のしようもなかったし、する気にもならなかった。

しばらくの間そうして突っ立っていた僕は、異常に高ぶっていた神経が落ち着き、比例して体が芯まで冷えていく感覚に襲われると、ようやく動けるようになった。

脱ぎ捨てたものをいすの背にかけ、新しい物を出し、頭からかぶって着込む。着た木綿地の冷たさに震え、僕は慌ててベッドにもぐりこんだ。

すぐに眠れるはずもなく、僕は危険な一人想いに沈潜して行った。夜の一人想いなんて、ろくな結果にはならないものだ。

詳しい経過は省く。思い返したくもないから。

しばらく悶々と、ベッドの中をてんてんしながら色々と考えた。その結果、僕は認めざるを得なかったことがある。

僕は明らかに永野に惹かれていた。

多分、人生で初めて、恋と呼べるような感情に捉われている。

そしてその感情は、僕にとっては非常に厄介なものだった。不愉快

快ですらあった。

あの女を自分のものになんかできるはずがない。仮に出来たとして、維持できるはずがない。

自分があの女をどう満足させるというのか。女を楽しませた経験もなければ、そもそも人を楽しませるために何かできるわけでもない。してやれることといえればせいぜい家庭教師くらいか、などと思いつつ、永野がああ見えて成績上位の常連であることを思い出してしまえば、それすら無用のことであると気付く。

そこまでわかっていて、あの女への恋心を認めろというのか。認めた上でどうしろというのか。

玉碎したらいいのか？ 永遠に腹の底に秘めたまま墓まで持っていくのか？

馬鹿馬鹿しい。諦めることすら、諦めようと考えることすら馬鹿馬鹿しい。

無かったことにするのが一番だと思った。

僕は生徒会執行部の一員として永野とかいう後輩と組んで仕事をしたが、それだけのこと。仕事が終わればそれで接触する理由も無くなる。

「先輩は大人ですね」

と誰かがいつていた。佐藤だったか、渋谷だったか。

何が大人だ、と僕は夜気に吐き捨てた。

大人ならもっとマシに自分の感情を処理できるはずだ。こんなに劣等感に襲われてのた打ち回ったりしないはずだ。

その永野をふるという、とてつもない大事業を成し遂げた男、佐藤晃彦は、さすがだった。

完全なる寝不足に陥って、めがねの上からでもわかるくまを作って登校してみると、生徒会改選の主要職にはすべて立候補者が決定

していて、しかも公約や演説草稿まできっちり仕上がっていた。

永野にそんな芸当が出来るはずがない。話どおり、佐藤と渋谷を口説き落としたのだろうが、それにしても仕事が速い。事前に準備を進めていたに違いなく、決して楽ではないその作業から考えて、わざわざ立候補決定前からそれを準備していたということは、佐藤には近未来に永野に口説き落とされて執行部入りすることがわかりきっていたのだろう。

そして、愚痴をいったりすることもなく、佐藤はのんきな顔でやっているに違いない。あいつは、自分を過小評価したり卑下しすぎたりする性格のくせに、根本的には明るい。

別にやりたくはないけれど、やるからには全力でやる。そんな意気込みを、人には絶対押し付けず、でも仕事にはみんなを巻き込んで、きっちり自分がやりたいことが出来る環境を自分で作りながら仕事を進めていく。

ああいうところは、本当に大人だと思うし、バイトで色々経験しているのも無駄じゃないんだろうな、と感心もする。

高校生で2歳も年下だと、本当に年下に思えるものだ。ところが、僕は佐藤に、年下だという感覚で接したことは無い。知れば知るほど大した奴で、おとなしい渋谷がべたばれだったり、大人な男を求めている永野が惹かれたのもうなずける。

あいつは僕をしきりに大人扱いするが、絶対あいつの方が大人だと思う。

その佐藤が、これから演説草稿の仕上げと他のメンバーの練習開始に付き合うために、メンバーを呼び出して生徒会室に向かうというその途中、僕を教室に訪ねてきた。

「文化祭でお役ごめんになると思ってたんですけれどね」

佐藤は苦笑していた。

「先輩達が綾華さんを壇上ではめてくれたおかげで、とぼっちりの生徒会入りですよ」

「いってただろう、お前みたいなのが生徒会に入るべきだって。苦

労的な奴が必要なんだよ」

僕がいうと、佐藤は頭をかいていた。

「見事にはめられましたね、俺も。結局先輩の思い通りだ」

「みんなが思っていたことさ。お前がいなきゃ、生徒会は回らない。少なくとも文化祭のお前を見ていたら、お前に永野と渋谷の三人組がいない来期の生徒会なんか、想像がつかない」

「ま、当選すれば、ですけど」

「落選する気か？ 当選するよりよほど難しいぞ？」

「そこまで身を張ってネタをかます気はありませんよ」

「語り継がれる伝説にはなるだろうけどな」

「んな伝説残したってねえ」

対立候補など、永野にこいつが相手では、出てくるはずが無い。仮に学校側に反永野的な動きがあり、対立候補を擁立する流れになったとしても、肝心な生徒の側にそれに乗ってくるバカがいるとも思えない。

だから、選挙で落ちるのはきわめて難しい。それがわかっていての会話だ。

「もう色々と伝説は残している身だしな。そんな伝説は必要ないか」

「何ですか、伝説って」

「あるだろう。文化祭でクーデター起こした奴も初めてなら、あのクソ忙しい状況の中で永野と渋谷の行方不明事件を乗り越えて運営しきった事だって、立派な伝説だ」

伝説だ。少なくとも、あの状況に少しでも関わっていた奴なら、みんな佐藤晃彦という男に凄みを感じている。のほほんとした顔で時々毒を吐きつつ、あの永野を適当にあしらいながら仕事を猛スピードで処理していく。それも、自分が以前からやっていたならともかく、参加するも初めてな文化祭の中核で。

「しかも渋谷との恋愛まできっちりやってのけているんだからな。大したもんだよ」

僕がからかい半分にそう締めくくると、そもそも褒められること

に慣れていない佐藤は、困ったような顔をしている。

「恋愛は……あっちが積極的だから助かってるというか……いや、好きですよ？　俺だって好きだし、色々頑張ろうとは思ってますけれどね、恋愛ってやっぱ女のものなんだなあ、とか思ったり」

「そうなのか？」

思わず食いついてしまい、食いついてから「しまった」思ったが、佐藤にはこっちの微妙な感情の動きを捉える余裕はなかったらしい。

「そうですよ」

と、ぼりぼりと後頭部をかきながら答える。

「男なんて恋愛の場面じゃ全然弱いつすよね。自分最高な奴ならともかく、おれなんて由紀の顔色うかがいながら生きてるようなものなんで」

うそこけ、と思ったが何もいわない。佐藤としてはそれが本音なのだろう。僕には渋谷が最大限佐藤のことを立てているようにしか見えないのだが。

「俺も大概自信無しなんで、由紀が俺のこと必要としてくれてるんだなあって思うと、それだけで力が出てくるっていうか、やる気が出てくるっていうか。生徒会の事だって、綾華さんがなんといおうと、由紀が期待してくれてなかったらやりやしませんよ」

永野が聞いたなら「あきちゃんいじめは楽しいなあ」などと凄惨な光景が繰り広げられかねないセリフだが、まあ、本心なんだろう。

「なんていうか……由紀が俺のことを高く買ってくれるなら、俺も捨てたもんじゃないのかなあ、なんて思ったりするんですよ。先輩とか綾華さんに褒められるのも嬉しいんですけどね、やっぱ好きいな女の子に褒められたり評価されたりすると、頑張んなきゃなあって思うし、なんか自分がすごく高められる気がするんですよ」

よくもまあ照れもせずにいえるな、と思うくらい、佐藤ははつきりといった。

「わかる気はするよ」

うんうんとうなずいてはみたものの、僕には、理解はできても、経験が無いだけに納得がいくものではなかった。そういうものなんだろうな、と想像がついたただけだ。

ただ、うらやましいな、とは思った。

恋愛がどうこうじゃない。自分が高められる、とまで思えるような相手と一緒にいられる、そのことがうらやましい。

自分にそんな恋愛が出来る瞬間が来たりするのだろうか。

志望校合格より、よほど難題な気がした。

4. 5 綾華 3

日は過ぎていく。

あたしは生徒会長になるために、あきちゃんと由紀は次の生徒会の計画を練るために、色々と忙しく動いている。

そういう忙しさって嫌いじゃない。やるべき事があって、人にいわれるんじゃない、人と相談はしながら、自分なりにどうしたらいいかを考えて動くのって、面白いし、やりがいもある。

でも何となくつまらないあって感情が抜けないのは、どうしても。ワクワク感が足りないというか、文化祭のときみたいな「めくるめく」という感覚に欠けているというか。

あの時は恋愛沙汰が絡んでいたからかなあ、と思うのも、ちょっと癪だった。恋愛至上主義の、自分の視野でしか物を見れないつまらない女と一緒にされたらたまらない、という、救いがたい感情があるからかもしれない。

女だけじゃなく、男にだっていっぱいいるけど、生きている意義が全部恋愛で出来上がっていて、そのフィルターを通してしか物を見ようとしらない人って、あたし的にはもう、友達付き合いしてるのもだるくしか感じない相手。それが明るいしろ暗いにしろ、自慢にしろ愚痴にしろ、恋愛話しかしてこないから、鬱陶しさしか感じない。

人様の恋愛なんぞ知らねーよっての。

それでも、一度あきちゃんへの片想いで火がついてしまった私の脳の恋愛領域は、簡単には鎮火してくれなかった。

別れ話をこじらすこともなく無事清算終了した、社会人のくせに一向に大人になれなかった前彼とのよりを戻すとか、破滅的なアホを演じずに済んだのは、間違いなくプライドに原因がある。んなアホになるくらいなら、由紀からあきちゃん奪ってどろどろの愛憎劇を演じるほうがマシ、という危険な考えも、無かったとはいわない。

すまん、二人とも。

それはともかく、なんかこう、前のめりになって物事に取り組んでいけない自分に、ちょっといらつきを感じないでもない今日この頃だった。

そういうあたしの中途半端な動きは、他の面子ならともかく、あきちゃんや由紀には明らかにおかしく見えていたらしい。

週が変わり、投票日まで数日を残すのみて日になって、あたしは二人から呼び出しを受けた。

秘書役を買って出ている、生徒会書記に立候補済みの由紀から、まずメールが来た。その後、追いかけるように、生徒会会計に立候補しているあきちゃんからも同じ内容のメールが来た。

『逃げるなよ』

という意味なんでしょう、きっと。

時間は放課後、場所はいつもの喫茶店。

この国道沿いの喫茶店も、なぜかあたし達が好んで出入りしているという噂が流れたらしく、一時はあからさまに客足が遠のき寂れまくっていたのに、最近では下校途中に顔を出すとはば満席だったりする。

おかげで店長にも顔が利くようになり、あきちゃんがいうには「一過性のブームだけで足を運ぶのはもったいない味」のコーヒーが、黙ってても一杯サービスで出てくるようになってしまった。

それがなおさら雰囲気を出すらしく、あたしが黙ってカウンターに座ってから店長がコーヒーを無言でサービスしてくれるまでの一部始終を目撃した生徒が、校内でそのことをべらべらしゃべってくれた結果、

「別に今さら喫茶店に入るなとかいうつもりはないがな、そこへの出入りを触発するような噂の出所にはなってくれるな」

という、不思議な苦情を教師から受ける羽目になった。昨日の事。知らないっての。

まあ、そんなこともあって、逆に週一は顔を出さないと格好がつ

かなくなってしまったこの喫茶店。

この日の客の入りはまばらで、むしろその方がこの店の雰囲気だよね、と失礼なことを考えていたら、先に来て待っていた二人も同じ感想を持っていたらしい。

「大きな声じゃいえませんけど」

とあきちゃんがクソ真面目な顔をしていうから、あたしも噴き出してしまった。

「同感、同感」

あたしが喜んでいると、由紀が早速ですけどいいながら、演説原稿の完成稿を取り出した。

「お待たせしちゃってすいませんでした、原稿できました。後は綾華さんなりの解釈で表現を変えていって下さい」

「ああ、ありがと」

受け取り、ぺらぺらとめくる。思っていた程には長くはなくて、いくつかある選挙公約の説明に、あたし自身のPR、これまでの実績とこれからの意気込み、なんかが羅列されている。

「しゃべりやすいように適当に変えて下さい。本当はそんな原稿は持たずに読むのが一番ですけど、まあ、そこまでは求められてないらしいです」

至って事務的に説明したのはあきちゃん。

「だから覚えなくてもいいですけど、ちら見するだけでかまずに話せるくらいにはなっという方がいいです。圧倒的にかっこいいですからね」

「別にかっこよさは求めてないんだけど」

「綾華さんが求めているかどうかなんて知ったことじゃありません。有権者が、つまり一般の生徒があなたに何を求めているかが重要なんです」

しゃあしゃあとこういうことをいい放つのがあきちゃんという奴。腹立つ。

「あたしの意図はどうでもいいんかい」

「どうでもいいんです。ついでにいつちゃえば、それは受かるために必要なことじゃありませんよ。今後生徒会を引っ張っていく上で、あなたのカリスマ性は高ければ高いほどいいんです。演説程度のことは華麗にこなしてみせる偉大な知性、とかいう感じの演出が出来ればいうこと無しです」

「あんたがやれよ、そんだけしゃべれば充分偉大な知性って感じじゃん」

「俺がやっても陰険な黒幕にしか映りませんって。適材適所っていうでしょ」

あきちゃんは前にも増して生意気になっている。浩樹先輩にいわせると「自分で育てておいて何をいつてる。むしろ責任とって欲しいくらいだ」ということらしい。

育てた覚えなんか無いぞ。

「まあ、なんだかよくわかんないけど、目は通しておくよ」

どうせ理屈であきちゃんに勝てるとは思ってないから、さっさと切り上げることにした。

そんな話をして、生徒会選挙以降の仕事の流れなんかも相談して、いつの間にか店に入って1時間以上が経っていた。

仕事の時には割と無駄口を叩かない人の集まりなので、内容は濃かった。あたしも仕事のときは無駄話はしない。しないんだってば。話がひと段落して、コーヒーのお代わりが届いた頃、あきちゃんが無気なく由紀の顔を見た。見られた由紀は、うん、とうなずいていた。何だろう、と思っていると、あきちゃんがちよつと低い声で話題を変えた。

「綾華さん、もしかして会長立候補、後悔してますか？」

「へ？」

いきなりだったから、あたしは思わず聞き返した。

「今さら聞か、それ」

「いや、後悔どころか、はめられてあんな悔しさはお察ししますけれどね、ちよつと気になるもんで」

「何がよ」

「綾華さんのやる気の無さです」

あきちゃんは笑いもしないでいった。なんなのよ急に、といいかけたあたしが口を閉じたのは、その隣で由紀が眼鏡越しにじっと生真面目な視線を射込んできていたから。

「やる気は、無いわけじゃないよ。いくらめられたからってさ、自分がやるって決めたんだから、やるよ。本気でね」

「それは心配して無いんですけれどね」

あきちゃんが濁したい方をする。こういう口調のときは、腹に何かある。

「じゃあ何を心配してるのかな？ お姉さまに洗いざらい吐いておしまいなさい」

たぶん、目はマジだったと思う。我ながら。

あきちゃんはそんなもんにびびるようなへたれじゃないけど、はぐらかす気は無かったらしくて、すぐに答えた。

「なんかこう、綾華さんらしくないなって二人で思ったんです。仕事になればまっすぐにぶつかっていくいつもの勢いが無いし、のめりこんで仕事をしてるなっていう感覚が無いというか」

図星過ぎて、あたしはすぐには答えを返せなかった。

あたし自身が感じていたことだ。夢中で仕事が出来ない自分への苛立ちや不満。

この二人は、それを感じ取ってた。

さすがに、文化祭の期間中にあれだけぶつかったり苦勞を分かち合ったりすると、ただでさえ頭の出来がいいこの二人には、いろいろと感じ取れてしまうらしい。

「なんだろうね。自分でもそう思うんだけどさ」

あたしが素直に認めたから、二人は意外そうな顔をした。もってこずると思ってたな、こいつら。

「べつにさ、はっきり原因があるわけじゃないんだよ。なんだか良くわかんないんだ。ついこの前まで、あんなに文化祭に入れ込んで

たのにね」

「それで醒めちゃいましたか」

「そういうわけじゃないんだよ。あれはあれ、選挙は選挙、会長職に就いたらそれはそれ、全部違うつてわかってるし、選挙はまあ正直どうでもいいけど、会長になったらどうしたいってのは、結構想像してて楽しかったりしたんだけどね」

そうなんだ。あたしは、口ではどうこういいつつ、会長になれるのを実は楽しみにしていた。なることじゃなく、なった後に何が出るか。何をしなきゃいけないか。それは想像しているだけでも大変そうで、でもやりがいありそうで、自分の取り組み方次第でどうとでも面白く出来そうな、すごく魅力的な仕事だった。

クーデター後の文化祭実行委員の仕事も、めっちゃくちゃ大変だったけど、めっちゃくちゃ楽しかった。

「選挙がどうでもいいっていうんなら、とりあえずは心配しないことにします。選挙が終わってもまだやる気が全然出てこないようなら、その時は心配しますからね、綾華さん」

あきちゃんが結構マジな顔でいう。

この子がマジな顔を見ると、もともときれいな顔立ちをしているところに来て、バイト先の現場仕事で焼けた肌や、脂肪の薄い頬なんか急に胸に迫ってきて、危険。

吹っ切れたつもりでいても、目の前にご馳走があれば反応したくなる程度には未練が残ってるみたい。

「はいはい、心配性な後輩を持てて幸せだわ」

憎まれ口を叩きながら、あたしは目を逸らした。

あたしともあろうものが。

悔しいけど、腹立つけど、やっぱりあたしはまだあきちゃんを諦めきれていないのかもしれない。

吹っ切れてはいないのかもね。

そう思ったら、なんかその場であきちゃんと由紀が仲良く並んで座っているのを見てるのがつらくなってきた。

「選挙がらみの話は終わりだね」

そういうと、あたしは勢い良く立ち上がった。

「原稿はもらってく。練習してきとくから、後でリハの時でもひと通り聞いてチェックしてみてね」

さっさと帰ることにした。

二人は展開の速さについていけないような顔をしていたけど、それにフォローを入れたりして対応してあげる余裕は、この時にあたしには無い。

とにかく、早くその場から離れたくなっていた。
ううん。

言葉を飾っても仕方がない。

あたしはその場から逃げ出したんだ。

4. 6 浩樹3

永野の選挙演説は、見事だった。

講堂で行われる演説会は、はつきりいって茶番だ。どうせ対立候補もないし、仮にいたとしても本命が勝つに決まっているのが我が校の選挙の伝統だ。

その茶番劇を、永野は見事に演じきって見せた。

入りは穏やかに、中盤には声の溜めを作って聴衆の耳を引き付け、次第に声量が増し、最後には自分への支持の呼びかけと愛校心を刺激する言葉を並べ、総立ちの拍手の中で降壇した。

完璧だった。誰が演技指導をしたのかはわからないが、見事の一言だった。

日本人の演説としては、小泉首相の郵政解散演説に並ぶんじゃないだろうか、とまで思ったが、友人の賛同は得られなかった。もちろん、誰もそんな演説、リアルタイムで見ちゃいなかったからだ。

「お前が仕込んだのか」

こちらは感動的ではないものの、落ち着いていて安定感抜群の選挙演説を行った、会計候補の佐藤に聞いてみた。

「まさか」

と、佐藤は首を振った。

「草稿は書きましたけれど、俺に演説の指導なんかできるわけないっすよ」

考えてみれば、佐藤は文章は得意でも、特に人前で話すのが得意なわけでも無いし、慣れてもいない。むしろ指導される側だ。

「じゃあ誰が」

「さあ」

佐藤は首をひねった。

「オリジナルじゃないですか？ 自分なりに、自分が思う演説をやってみせたんだと思いますけれどね」

渋谷には、聞くだけ無駄だった。

自分の演説は挨拶程度に収め、それもかなり緊張していたらしく、聞き取るのも難しい小声でぼそしゃべった挙句に逃げるように降壇するという、ある意味生徒会選挙では風物詩ともいえる役を演じた彼女だが、そもそも彼女は永野の熱狂的なファンだ。冷静な評価や背景の解説なんて、望む方が間違っている。

本人に聞けばいい話ではあるが、それが出来れば佐藤になんか聞いてはいない。

永野は、校内の「アイドル」から「女帝」に格が上がり、絶対的な支持を受けるようになっていた。演説なんかしなくてもそうなっていくカリスマの持ち主ではあったが、演説後の彼女の人気は凄まじかった。

文化祭の後夜祭、ステージ上で会長就任宣言をして以来、男女を問わず支持率独走状態が続いていた永野も、間違いなく学校の歴史に残るだろう名演説の後、本人がドン引きするほどの注目を浴びた。「気持ち悪がってますよ。あまりにも反応がすごいんで」

佐藤が苦笑していた。

「反応してしまう側の気持ちはわかるな、あんなものを聞かされちゃあ」

「そうですけどねえ」

佐藤は、本来ポストは二つあるのに、立候補者が一人しかいなかった副会長に、会計に当選したら自動的に就任することが決まっている。これは、会計職が副会長職兼任可能なポストという生徒会の規定によるもので、もちろん関係者全員一致の既定方針だ。

立候補できるポストは一つに限られているものの、佐藤の力を考えたら会計だけでは役不足、副会長だけでは会計役に人を欠く、ということが決まった。

そんな切れ者だとは思わせないのほほんとした顔は、佐藤の武器かもしれない。

「ここまで人気者になったら、うっかり話しかけるのも控えないと

な」

「ああ、そうですねえ、先輩なんかなまじ綾華さんとながりが深いから、熱狂的なファンに暗殺されかねませんもんね」

毒まみれの冗談を飛ばした佐藤。僕はその表現が引かかった。

「つながりが深いって？」

聞き返すと、佐藤は顔色も変えずに答えた。

「俺を除いたら、最近綾華さんの周りに一番寄り添ってた男は先輩だって、噂になってますし」

「そうなのか？」

初耳だった。しかも、かなりの衝撃を伴った。

「少なくとも文化祭の間はそうだったわけですからね、色々噂にはなりますよ、そりゃ」

永野と噂になった、と聞いて、僕がどうなったか。

最悪の反応をしてしまった。

嬉しくて、有頂天になっていた。

あの永野と噂になる。それは、永野と自分が釣り合っていると見られている証拠じゃないのか。僕はそれだけの男になれているのかもしれない。

もちろん、そんな風に浮かれていられたのは一瞬のことで、すぐに我に返ると、気分はどん底まで下がりきった。今、僕は何を考えた、と。

調子に乗るな、釣り合うわけが無いだろう、あんなに輝いている女、僕の手になんか負えるはずが無い。

などと考え込んでいると、当然勉強に手がつくはずもなく、いっそう惨めな気分になった。

そんな気分を抱えたまま、金曜日の放課後を迎える。

生徒会選挙の投票が行われた。

各クラスに投票箱が設置され、それぞれに投票が行われ、選挙管理委員が箱ごと回収し、体育館で開票が行われる。いつもの手順だし、三年にもなれば混乱も無かった。

そもそも、自分達には関係ない話だという意識がある。もう、自分たちの代の生徒会活動は終わってしまった。次代に引き継ぐのだから、好きにやってくれればいい。

僕はそうもいつてはいられない立場のはずだけれど、永野を会長に、佐藤を副会長に就けられれば何もいうことはないから、ここまです状況が進んでしまえば、他の生徒に混じって投票する以外にやることは無い。

即日開票の結果は夕方には貼り出され、翌週月曜日の午後に開かれる定期生徒総会で新執行部が承認される、という流れになる。

そこでは、前会長の退任の挨拶と、新会長の就任挨拶が行われる。この挨拶は本当に挨拶程度のもので、演説会のような熱狂は起こりようがない。

その後、文化祭での活動状況報告、他校の生徒会との交流報告などが旧執行部の最後の仕事として行われ、最後に新執行部が年度内の活動予定について説明し、質疑応答の時間を設けて散会となる。

そっちの準備はとくに出来上がっている。前会長の和馬とも打ち合わせは終わっていて、様々な原因が重なって意欲を失い、会長としての責務を果たしたとはいえない和馬も、最後くらいはきれいに収めよう、とやる気を出してくれていた。

投票が終わってしまったえば僕にやることはなく、だらだら学校に居続ける趣味はなかったから、さっさと帰ることにした。

どうせ、居残って自習したところで、頭に入るとも思えない。

今週は土曜が休みだから、これで、とりあえず週末の間は一人で見られる。

ほっとしていた。

誰かと一緒にいると、それだけで永野がもたらしてくれた心の揺

らぎをさらけ出してしまいそうで、つらかった。

そういう自分の情けなさがおさら惨めさを強く感じさせるから、一人でいられるなら、それに越したことは無いというのが本音だった。

暗いなあ、と思うが、どうしようもないほどの劣等感に襲われている時期なんて、誰だってこうなるんじゃないだろうか。

誰かに呼び止められる前に帰る、というのは、会計として執行部の中枢を押さえていた当時にはなかなか難しいことだった。でも、実権を手放してしまった今、わざわざ僕を呼び出してこまごまと聞いてくる役員やクラス委員はいないし、教師達も、成績以外のことで話しかけてくることはなくなった。

寂しさはある。でも、今はありがたいと思えた。

生徒玄関で靴を履き替え、外に出ようとする。ちょうど、選挙後の帰りの群れとぶつかってしまったらしく、玄関は人が多い。校門までの道も人であふれていた。

しまった、少し時間を稼いでから出て来れば良かったか、と思っても後の祭りだ。わざわざこれから校内に戻ってやることを探す気にもならない。

あきらめてそのまま帰ろうとした、その時、いつもブレザーの内ポケットに入れている携帯が震えた。

この時間にかかってくる電話なんて、生徒会関係の呼び出しか、家からの帰り道にあれこれ買ってきてという話に違いない。

人と関わりたくないときに限って電話なんかかかってきやがる、と思いながら携帯を引っ張り出すと、サブディスプレイには、そのどちらでもない表示が出ていた。

知らない携帯電話の番号が、11桁の数字の光となって表示されていた。

普通、出ない。

携帯で知らない電話に出ること自体、いつもの僕なら絶対にしないことだし、まして気分が落ち込んでいるときだ。知らないふりを

していればいい。

でもなぜか、僕は折りたたみ携帯を開いていた。出るな、出るな。どうせ電話なんか好きでも無いくせに。そう思う僕の心とは裏腹に、右手の親指が携帯の通話キーを押していた。

「……はい」

周囲のざわめきが携帯から聞こえてくるはずの音をかき消す。僕の短い応答も、相手に聞こえているかどうか。

次の瞬間、それでもきちんと相手から声が返ってきた。

『あ、出た、良かった』

女声。

『番号変わったから出ないかと思った』

聞き覚えは……ある。あるに決まっている。

とっさに言葉が出なかった。

周囲のざわめきが耳に入らなくなる。

『もしもーし』

「……聞こえてる、といたいけど、まずは名乗るのが礼儀じゃないかと思うよ」

『その口ぶりは、相手が誰かわかってるでしょ』

「まあ、な」

笑みを含んだ声の主は、僕の気分をどん底まで落とし込んでくれた張本人だ。

永野だった。

『もしかして帰ろうとしてた？』

「もう玄関を出るところだ」

『待った！ 帰るな！』

「帰るなといわれても、なかなか脚がいうことを聞いてくれなくてね、一步一步大地を踏みしめて」

『踏みしめていいから逆向きに進んでよ、お願い』

「何か起きたのか？」

永野の様子が必死さを増していたから、僕は思わず悪い方に想像を働かせた。確かに、何か緊急事態が起きたら、生徒として一番実例を知っているのは僕だ。新生徒会長当選確実の永野が意見を求めるには、最適の人間だろう。

『ああ、そういうんじゃない。それは心配しないで』

僕の声から冗談の気配が消えたのを察したか、永野は慌てたようにいい足した。

『携帯変えたから、その番号知らせとこうと思ったのがひとつ。それから、先輩があたしの声を聞きたがってるんじゃないかなあと思ってたのがひとつ』

「切るぞ」

『あー、もー、あきちゃんといい先輩といい、なんでこのガツコの人たちは渾身の冗談に冷たい反応するのかなあ』

「そりゃ自分の胸に聞け」

傍から聞いたら、僕が永野を嫌っているようにしか思えないだろう。そして、明らかに永野はこの手の会話を楽しんでいる。

『もっと女の子は大切に扱わないとダメだよ？ そんなんじゃ女の子に嫌われちゃうぞ？』

「君に似合わないセリフがあるとしたら、まさに今のセリフだな」

『ひどい、ひどいわ、純真な少女を捕まえてそんな言葉』

「切るぞ」

『いくら気が無いからっていつてもさ、その反応はひどいと思うわけよ』

「気が無い相手をからかう君の姿勢もどうかと思うわけだ」

『お互い様って事ね』

「結論が出たところで、本題は？」

勤めて平静を装う。装わないと、舞い上がりそうになる心を抑え切れそうにない。

『んとね、月曜の総会についての打ち合わせをしたいんですけど』
「当日の昼休みにするって、連絡があっただろう」

『それはそれ。新会長としては色々不安があるからさ、どうせ実務面はあきちゃんに任せとけば大丈夫だけど、会長としての仕事について、先輩にちゃんと聞いておきたいなって思っ』

永野の口調は意外に真摯だった。

そういうことなら、僕にも異論は無い。会計としてやってきた一年の締めくくりに、新会長への引継ぎをやっておくのは悪くない。

「和馬……前会長も呼ぶか？」

『うーん、それはいいや。あんまり参考にならなさそうだし、二人で話したいし』

二人で、という言葉に、胸が躍りそうになる。

落ち着け。

相手にそういうつもりは無い。

「わかった。どこにいけばいい」

4. 7 綾華 4

新しい携帯に変えたのは、前彼の仲間連れから来るしつこい連絡を断ち切るのが一番の目的。

あたしに復縁の気配がなく、生徒会長なんか引き受けてすっきり「まじめちゃん」になろうとすることが気に入らないって連中から、あの手この手で連絡が来る。

いい加減うざいにも程があるから、あたしはもうあんた達と関わるつもりは無いからね、ということを示したかった。

いずれ番号が知られることがあっても、その番号を知らされなかったこと自体が絶縁を意味しているとわからせたかった。

だから、番号もアドレスも、ごく一握りの友達にしか伝えてないし、友達はみんな事情を察してくれている。

バカばっかやってきた割に、友達には恵まれてるなあって、自分でも思う。感謝感謝。

その番号を、浩樹先輩に伝えるのは、正直迷った。

伝えること自体は迷うことじゃなくて、知ってて欲しかったし、知らせるつもりではいた。

問題はタイミング。

ちゃっちゃと伝えちゃえばいいものを、なぜか私はためらってしまった。他の人には一気にメールを流して知らせてしまったというのに、先輩にだけはそんなメールが送れなかった。

選挙の投票が終わって、選挙管理委員が投票箱を回収した後、あたしは急に会長になることに不安を感じて、教室を飛び出していた。どうして急にそんなになっちゃったか、自分でもわからない。

ただ、支えてくれはらずの、きつと全力で支えてくれるはずのあきちゃんと由紀が、あたしの中で遠い存在になりかけていて、それが足元をぐらつかせていたのかもしれない。

もちろんあの二人が遠くに行ってしまうはずはなくって、一番近

いところで才能を発揮してくれるに違いないことくらい、あたしにだってわかってる。

でも、二人はあたしの心までは支えてくれない。

あたしの心に踏み込んでくるようなまねは、絶対にしないだろう。するわけない。あたしの想いを断ったあきちゃん、断たせた由紀、どっちもあたしの心に踏み入る資格は自分達に無いって事、充分すぎるほど理解しているはずだから。

浩樹先輩だって、あたしの心は支えてくれない。あの人は恋愛に興味が無いらしいし、あたしのことを迷惑くらいにしか思っていない。っぽいし。

そりゃ、あれだけ迷惑かけて、クーデターで散々恥かせて、文化祭の最中にも迷惑かけて、いい加減うんざりでしょ。わがままなお嬢の相手なんかしていられるか、受験生なんだぞ、くらいに思っているかもしれない。

そんな人に連絡先教えて、迷惑がられるだけなんじゃないの？
という自問が、頭から離れなかった。

不思議と、あの先輩だけは、あたしが色仕掛けしようが駆け引きしようが、乗ってこない気がした。自分でいうのもなんだけど、あたしが色仕掛けして少しも揺るがなさそうな男って、あんまり心当たりが無い。

する気も無いけどさ。

でも、教室から飛び出して、今日はなぜか誰もいない化学室に逃げ込んだとき、あたしは今が先輩に連絡するチャンスだ、という想いに占領されてしまった。

なんでだろう。

よくわからない。

うじうじ悩んでる自分の姿が腹立たしかったのかもしれないし、生徒会のことを考えていれば、とりあえず余計なことを考えてる余裕はなくなるって思ったからかもしれない。

間違っても「勉強しなきゃ」とは思わないあたりが、あたしらし

いっちゃあたしらしい。

かけてみれば、何のことはなかった。

楽しかった。

あきちゃんと同じような反応が返ってきたのには笑っちゃったけど、それ抜きにしても楽しかった。

何が楽しいっていうんでもない。ただ、話してるのが楽しかった。相手は機嫌がいいとはいえない声だったし、帰り際を止められて不満にも思ってるかもしれないけど、これから会えるんだ、と思ったら、ごく単純に嬉しかった。

こんな感情、あたしもあったんだ、というくらい。

あきちゃんと会えるときも嬉しかったけど、もうちょっと意地悪な気分が強かった。さて、どんな風にいじめてやろうか、そしたらどんな風に反撃してくるかな、という。

今は違う。

ただ、先輩に会えるのが嬉しい。しゃべれるのが待ち遠しい。ちょっとだけね。

なんて考えているうちに、先輩が化学室の戸を開けて入ってきた。

「待たせたね」

「ごめんね、無理に呼び出して」

「君らと付き合っていると、無理や無茶が当たり前になるのが怖いよ」先輩は苦笑していた。確かに無理や無茶でここまで突っ走ってきただけがするから、反論する気にはならない。

「開票は待たなくていいのか？」

「いいよ、あんなの」

スツールに座りながら先輩がいう。あたしは適当に手を振って見せた。

「あんなのって、会長候補がそんなんでいいのか」

「あたしがじたばたしたって票が変わるわけでも無いでしょ。時間になれば結果は出るし、出たからって今日のあたしが出来ることって別に無いし」

「無いのか」

「無い。あきちゃんたちがまとめるだけまとめてくれちゃってるから、月曜日の打ち合わせまでにそれぞれが資料読んでくればいいの」
「勝利宣言とかあるだろう」

「どこで？ いつ？」

「体育館の開票所のそばに掲示板があるだろう。あそこに結果が貼り出されたら、その前で新会長が代表して勝利宣言をするんだよ」

「やーよ、めんどい」

「めんどいって」

先輩がまた苦笑した。

「やんなきゃいけないわけじゃないんでしょ？」

「まあ、な。伝統的にやってるってだけで」

「なんか理由あんの？」

「そうだな、新聞部が写真撮って、記事にする」

「それから？」

「職員が写真撮って、学校ブログの記事更新をする。ついでに後援会やPTAに新任会長の紹介文を送る」

「それから？」

「来年度の学生募集パンフあたりに写真を載せたがるかもしれないな。被写体がいいから」

「やーよ、めんどい」

本当にめんどい。

「だいたい、載せるならギャラ取るわよ。宣伝にただで協力してやるほど安くないわ」

会長に立候補した時点でそんな理屈が通るはずがないんだけど、それを聞いた先輩はくすくす笑っていた。

「確かに十分にギャラとして宣伝できるレベルだな」

「まーねー。あたし、美人だし」

わざとらしく抑揚をつけて胸を張って見せた。突っ込み待ちで得意げな顔までしたのに、先輩は乗ってこなかった。

「美人だな」

簡潔に認めてくれた。

「……突っ込みもうよ、調子こいてんだから」

想定してなかった返しに、あたしが抗議すると、先輩は今度は笑いもせずに行った。

「君はきれいだ。間違いなく。あえて突っ込みを待たずとも別の面でぼけてくれないか」

まともに目を見ていわれたから、今までさんざん「美人」「かわいい」「きれい」といわれ続けて育ってきたあたしが、不本意極まることに、思いつき動揺した。

「そ、ちょ、ま、そ、そりゃあたしはきれいで美人だけど、面と向かって褒めるとか、あんた、キャラじゃないにもほどがあるでしょ」「落ち着けよ、そっちこそらしくもない」

先輩が今度は苦笑した。

あたしは動揺した自分になおさら動揺してた。今まで、褒められてこんなに動揺した経験がない。

「だいたい、君は僕のことを人を褒めない人間だと思っているわけか」

「違うの？」

あたしがいうと、先輩はにらむような目になった。

「お世辞はいえないけどね、人を褒めないわけじゃないよ」

「ご、ごめんなさい」

「謝らなくていいさ、そういう風に見える僕が悪い」怒ってるわけでもないみたい。

「クールな感じがするもん。雰囲気は柔らかいけど、冷静沈着って感じ」

「それと褒めないのはイコールなわけか」

「なんとなく。思い込みだけだね」

「確かに君を褒めことはなかったかもしれないな」

「褒めようよ。女の子は褒めてなんぼだよ?」

「今度からはそうするよ」

先輩が笑った。

苦笑じゃない先輩の笑顔を見るのが久しぶりで、その笑顔があたしにはものすごく魅力的に見えた。

思わず自分でいった言葉を訂正しようとする。

「あれだよ、褒める相手は選びなよ？　先輩が褒めたら、結構相手は勘違いするからね？」

「勘違い、というと？」

「えーと」

あたしは言葉に詰まった。なんて表現しよう。思ったことをストレートにいいのかな。表現くらい変えた方がいいのかな。ええい、いってしまえ。

「先輩に褒められたらね、大概の女の子は好きになっちゃうよ」

「そうなのか？」

先輩は虚を突かれたような顔をしている。意外すぎる言葉だったらしい。

「そうだよ。あきちゃんもそうだけどさ、自覚無さ過ぎ。いい男にまともに褒められたら、少なくとも悪い気はしないよ。男だってそうでしょ、あたしくらいの美人に褒められたら嬉しくない？」

「嬉しい。なるほど」

と、一度認めてから、先輩は首を振った。

「待て待て、前提がおかしい。僕のどこがいい男なんだ」

「だから自覚無さ過ぎだってば」

本気か、こいつ。

「自覚しろっていわれても困る、バレンタインで無敵の記録持ちだぞ、僕は」

「なにそれ」

「親以外に一つたりともチョコをもらった経験が無いまま高校卒業見込みだ」

「嘘でしょ？　絶対嘘」

嘘でなきやおおげさなだけ。だって、本気で思うもん。先輩、いい男だ。ルックスもそうだけど、比較するのもばかばかしいくらい、社会人の前彼と比べても落ち着いていて、考え方も大人。かっこいい。本気で。

「事実だから困る」

「それさ、絶対別の理由があるよ。同盟組まれたとか」「同盟？」

先輩は困った顔をしてる。

「そう。抜け駆け無しの特約。アイドル好きなタイプとか、そういうの仕切るのが好きな奴っているんだよ」

「それならそれで僕も気付くと思うけどな」

「いやいや、ここまで自覚が無い極悪非道な奴なら、気付かなくてもそれはそれで不思議じゃない気がしてきた」

「ずいぶんひどいことをいわれてる気がする」

「当然でしょ、女の純情を何だと思ってんのよ」

やばい、なんかすごい楽しい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7843i/>

小さな祈り・補遺

2010年10月8日12時43分発行